

小・中学校

# 東京都道徳教育郷土資料集 (第1集)



平成18年3月

東京都教育委員会

## はじめに

平成十七年十月に、中央教育審議会「新しい時代の義務教育を創造する」の答申が取りまとめられました。この答申では、義務教育の目的遂行のために、「学校では、子どもたちに『確かな学力』として基礎的な知識・技能と思考力、創造力をはぐくむとともに、『豊かな心』『健やかな体』を培い、これらをバランスよく育成すること」が求められています。また、同答申においては、学校・家庭・地域の連携と適切な役割分担の重要性が指摘されています。

さて、東京都教育委員会では、平成十年度から区市町村教育委員会と連携して、「道徳授業地区公開講座」を実施してまいりました。この公開講座の趣旨は、次のとおりです。

- ① 意見交換を通して、家庭・学校・地域社会が一体となった道徳教育を推進する。
- ② 道徳の授業の質を高め、道徳の時間の活性化を図る。
- ③ 道徳の授業を公開することにより、開かれた学校教育を推進する。

道徳授業地区公開講座は、平成十四年度からは都内すべての公立小・中学校で実施され、平成十五年度には公開講座の一層の充実を目的とした同推進委員会が設置されました。

このように今日まで、家庭や地域社会と一体となって推進する心の教育の普及に努めてきたところがあります。今後、より一層、道徳教育を推進していくためには、学校における道徳教育の要である「道徳の時間」の特質を生かした指導の一層の充実が不可欠であることは言うまでもありません。

本書は、東京都公立小・中学校のすべての児童・生徒に充実した道徳教育を推進していくために、道徳の時間に活用する「東京都を題材とした読み物資料」を、活用例とともに編集したものです。

各学校においては、本書の活用と同時に道徳の時間の充実が図られますよう期待しております。終わりになりますが、本書の編集に当たられた道徳授業地区公開講座推進委員会の皆様、資料提供をしてくださいました各区市町村教育委員会に厚く御礼を申し上げます。

平成十八年三月

東京都教育委員会教育長

中 村 正 彦





# 第一章 郷土資料

とうふや　ハベえ（文京区ぶんきょうく）

ある日、とうふを　うりあるいて　いた　ハベえは、  
きずついて　ぐったりした　子ぎつねを　見つけました。

「これでも　たべて、げんきを　だしな。」

ハベえは、うりものの　とうふを　子ぎつねに　あげ  
ました。すると、子ぎつねは、それを　おいしそうに  
たべました。

げんきになつた　子ぎつねは、ハベえの　ほうを  
なんども　なんども　ふりかえりながら、山の　ほうに  
かえって　いきました。

それから　すう年が　たちました。ハベえは、小石川こいしかわ  
（文京区）に　店みせを　もちました。お金かねが　ひつような  
ハベえは、かんがえました。

「そうだ。とうふを　少し　小さくしよう。そのぶん

たくさん つくって もうけて やるぞ。」

ハベえは、小さくした どうふを、おきやくさんに  
うりはじめました。

ある日、ハベえが、店の ぜにばこの お金を  
しらべると、木の はが まぎって いました。

「おかしいな。お金が 木の はに かわって  
しまったぞ。」

つぎの 日も、つぎの 日も、木の はが お金に  
まぎって いました。小さくした どうふが うれるほど、  
木の はは ふえて いくのです。

ハベえは、ふしぎに おも 思って、おかみさんに  
たずねました。

「だれの しわざか 知らないか。」

「そういえば、十さいくらいのおとこの子が どうふを

かいに きた あと、かならず 木の はが 入って  
いますのじゃ。」

おかみさんは、くびを かしげながら いいました。

「そいつに ちがいない。つかまえて とっちめて  
やる。」

つぎの 日、ハベえは、おとこの子の あとを つけて  
みることに しました。ハベえは、おとこの子に  
おいつくと、

「おい、わるさを するのは やめるんじゃ。」  
と いった、うでを つかまえました。

男の子は きゃつと こえを あげて、その ばに  
すわりこむと、なんと きつねに なりました。

「おお、おまえは あのときの きつねじゃないか。  
たすけてやったのに、なんだって 木の はで



ごまかして、わしをこまらせるんじゃ。」  
すると、きつねはかなしそうに、小さなとうふを  
手にして、ハベえのかおをじっと  
見つめました。

「そうか、おまえは、わしらに  
気づかせようとしてくれたのか。」

それから、ハベえは、もとの  
大きくておいしいとうふを  
つくって、また、みんなに  
よろこばれるようになりました。



(大野 真 作)

出典 (東京都教育委員会 小学校)

郷土に根ざした道徳資料集 第2集)

たま川の夕日

(世田谷区)

三吉じいさんは、たま川のわたしぶねのせんどうです。  
ある日のおひるすぎ、めずらしくおきやくがないので、三吉じいさんはたいくつでした。きせるにたばこをつめ、スパツ、スパツと白いけむりをはきだしながら、たま川のながれをながめていました。やがて日も西にかたむき、たま川のながれが、夕日にきらきらかがやきはじめました。うつくしく夕日にかがやくたま川のながれを見ていた三吉じいさんは、いつのまにか、うとうといねむりをはじめました。

三吉じいさんが、はっと目をひらくと、そこに一人の女の人がたっていました。女の方は、すきとおるようなうつくしいこえで、しずかにいい

ました。

「びっくりさせて、もうしわけありません。わたしは、この川にすむさかなの精せいです。わたしの夫おととがつりばりをのんで、もう五日もくるしんで

おります。どうかおたすけください。」

ふしぎなできごとに、口もきけないほどおどろいた三吉じいさんでしたが、女の人のかなしそうなこえをきくと、とてもきのどくにおもいました。

「くるしんでいるかたは、どこにいますか。」

「はい、あのよどみの川ぞこにおります。」

ゆびさすほうを見ると、そのよどみはふかく、きみがわるいほどしずまりかえっているのです。

「たすけてあげたいが、わたしはもうこの年だ。」

とても川ぞこまではもぐっていかれないな。」  
とことわりました。

「はい、それは　ごしんぱい　いりません。わたしと  
いっしょなら　だいじょうぶです。どうか……。」  
あまり　しんけんに　いうので、たすけて　やることに  
しました。

よどみに　つくど　女の人は、三吉じいさんの　手を  
とって　よどみの中へ　あんないしました。川ぞこを  
しばらく　いくと、大きな　いわあなの　まえに  
つきました。中から　くるしそうな　うめきごえが  
きこえます。

三吉じいさんを　見ると、つりばりを　のみこんだ  
さかなが、なみだを　ながしながら　いいました。

「おたすけください。はりが　のどに　ひっかかり、もう  
五日も　たべておりません。」

三吉じいさんが　口の中を　のぞいてみると、大きな

ふとい つりばりが 一本、のどの おくのほうに  
ひっかかり、とても いたそうです。

どうやって とろうかと、ちよつと かんがえましたが、  
すぐに よい かんがえが うかびました。それは、  
きせるでした。さきの まがっている きせるの  
がくびは、はりを とるのに ちようど  
よかったのです。

三吉じいさんは、おもいきって のどの おくに  
きせるを つっこみ、みごとに はりを ぬきとりました。

よどみの そとまで ぶじに おくりだされた  
三吉じいさんは、さっぱりした きもちで

いっぱいでした。そして、大きく おねを ひろげて、  
川かぜを いっぱいすいこみました。

大きな、まっ赤<sup>か</sup>な たいようが、ちようど 西の  
山のはしに かくれるところでした。

そのつぎの日も 三吉じいさんは しごとに  
でかけました。三吉じいさんが 村人むらびとを のせ、  
おこうぎしへと ふねを こいでいると、そのふねの  
そばを まごいと ひごいが およいでいました。  
ニひきの こいは、三吉じいさんが しごとを  
おえるまで、ふねの そばを はなれませんでした。  
それから、まい日、三吉じいさんの ふねを  
まもるように、いつも ニひきの こいの  
およぐすがたが ありました。

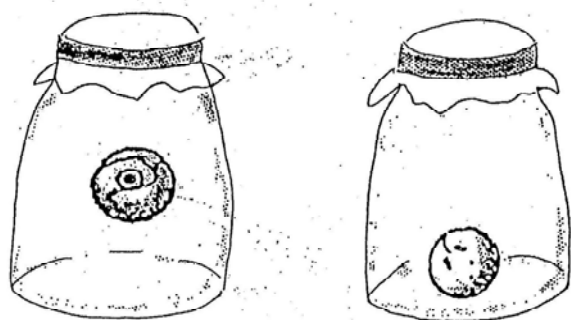
出典（世田谷区道徳教育資料集十五集）

やまめの やまちゃん (青梅市)

おうめの たま川には、いろいろな魚が  
すんでいるよね。その川を大切にしてい、魚を  
そだてようと いう人たちが、魚のおやがわりに  
なって くれる人を さがして、たまごを  
あずけるって いう 話を 聞いたことが  
あるかな？

たまごの ぼくを びんの中に  
入れて、うちへ つれてかえって  
くれたのが、しゅうくん。

そして、ぼくのなまえは、やまめの  
赤ちゃん・やまちゃんって いうんだ。  
いい なまえだろうか？



しゅうくんが、つけてくれたんだよ。  
でも、ぼくたちやまめのなかまは、  
つめたくて、きれいな川にしかすめないんだ。  
だから、ぼくの今すんでいるおうちは、  
しゅうくんの家のれいぞうこのびんの中。

しゅうくんは、びんの中の水をきれいに、  
とりかえたり、  
えさをくれたりして、  
大切に　ぼくを　そだててくれたんだよ。

ぼくは、まるい　たまごから、  
小さな　黒い目が　二つ　できるんだよ。  
その目の　まわりが　ぎん色に　なるんだ。



そして、もうすこし  
大きくなると、おねの  
ところに、大きな ボールを  
ぶら下げた、魚の すがたに  
なって いったんだよ。

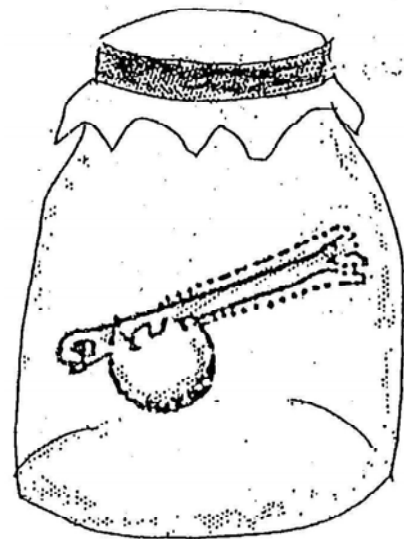
その ボールの 中には、  
たっぷり えいようが、つまっているんだ。

しゅうくんは、

「げんきかい？」

「ぎん色のうろこがでてきたね。もうすぐ外に出られる  
ね。」

といて、  
ずっと、ぼくが 大きくなるのを、おうえんして  
くれたんだ。



でも、ぼくたちの中には、  
魚のかたちに、なれなかったなかまも、  
たくさん いるんだって。

今、ぼくは まだまだ 小さいけれど、  
りっぱに やまめの すがたに なったんだよ。

いよいよあしたは、  
ほんとうの ぼくたちの  
すみかの、たま川へ  
たびだつんだ。

しゅうくん、今まで ありがとう。  
また、きつと どこかで、



あえるよね。  
たのしみに  
しているよ。

出典

（青梅市教育委員会道徳資料集）

（中嶋 博子）

かっぱと 与助よすけ (北区きたく)

まなつの たいようが、ぎらぎらと teriつけ、じっと  
して いても、あせが ふきだして くる あつさです。  
荒川あらかわで、さかなを とって かえって きた 与助が、  
川ぎしに ふねをつけると、男の子が たおれて  
いました。

おどろいて だきおこして みると、なんと、かっぱの  
子どもでした。びっくりして、手を はなしました。

でも、かわいいそうに なって、また、だきおこしました。  
「おい、どうした。しっかりしろ。」

与助が、いくら からだを ゆすっても かっぱの  
子どもは、うんうんうなるばかりです。与助が、こまっ  
ていると、岩渕いわぶちの 静勝寺じょうしょうじの おしよさまが、  
とおりがかりました。

「たすけるには、どうしたらよいでしょう。」

「あつさで、あたまの さらの 水が かわいたの

じゃから、さらに、水をかけて やるが よい。」

そこで、与助は、川の 水を くんできては、さらに、  
水を かけて やりました。

なんかいも なんかいも くりかえしました。

夕日が しずむ ころ、かっぱの

子どもは、げんきを とりもどしました。

与助が、

「よかったなあ。早く うちへ

おかえり。」

というと、なんども なんども

おじぎをして、かえって いきました。



(原 洋子 作)

たのしい一日 (日野市)

きょうは、だいすきな おじいちゃんが 多摩どうぶつ  
こうえんに つれて 行って くれる日です。けいすけは、  
あさから わくわくしていました。ライオンや コアラ、  
チンパンジーなど、たくさん の どうぶつを 早く  
見たいと おもって いたのです。

「けいすけ、さかみちが おおいから、ゆっくりと  
あるくのですよ。」

「うん、おじいちゃんが つかれないように して  
あげるんだ。」

でかける とき、おかあさんに げんきよく  
こたえました。けいすけの おじいちゃんは、あしが  
よわく なって いるのです。

多摩どうぶつこうえんに ついて、見て まわって

いる　うちに、けいすけは　どのどうぶつも　見たくて、  
おちゆうに　なつてしまいました。ハアハア　いつている  
おじいちゃんを　いつのまにか　いそがせるように  
して　あるいて　いました。

さかを　のぼった　ところに、人が　たくさん  
あつまつて　いました。なんだろうと　おもって、  
けいすけは　ひとりで　さきにはしって　いきました。  
そこには、とても　見たかった　チンパンジーが  
いたのです。

けれども、小さい　けいすけには　よく　見えません。  
いっしょうけんめいに　のびあがっても、やっと  
すこしのぞく　ことが　できるだけでした。  
その　とき、からだ　が　きゆうに　ふわっと  
もちあがったのです。

「これで　よく　見えるだろう。」

おじいちゃんが うしろから だきあげて くれたの  
でした。チンパンジーたちの ようすが 目の まえに  
ひろがりました。

おじいちゃんの ひたいには、あせが  
にじんでいました。そして、おもいはずの けいすけの  
からだを もちあげて いるのに、おじいちゃんは  
にこにこして いました。

「おじいちゃん、ありがとう。」

それからは、ふたりで 手をつなぎ、ゆっくり  
見てまわりました。

とても たのしい 一日でした。

(稲葉 春紀 作)



## 人力車 (港区)

港区北青山三丁目にある善光寺というお寺のけいだいに、「人力車発明記念碑」が建っています。

この碑には、「明治のはじめ、和泉要助、鈴木徳次郎、高山幸助の三人が人力車を発明し、国からおほめのことばをいただいた記念として、これを後の世までもつたえたい。」という意味のことが書かれています。

明治のはじめごろの日本には、自動車も電車もなく、乗り物として使われていたのは、かごや馬くらいのものでした。

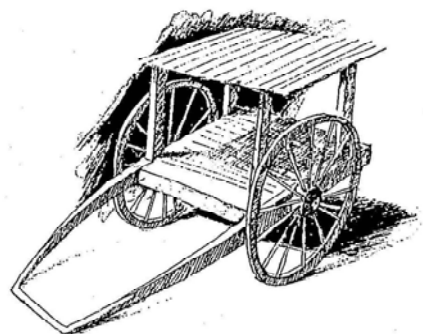
やがて、外国からゆえに馬車が、横浜の町を走るようになりました。これを見た和泉要助たちは、馬が引くかわりに、人の力で引く車を作ったらどうだろうか。そうすると、手がるに引くことができるし、細い道へも入っていくことができるから、きっとべんにちがいないと考えました。三人は、力を合わせて作ることにしま

した。

はじめに作ったものは、大八車に四本の柱はしらを立て、日おおいがうごかないように取りつけたかんたんなものでした。

ためしにのってみると、こしかけにくいうえに、足を置くところがない。ゆれがはげしくて、すわっていられない。東京府とうきょうふからの許可もおりない。このようないろいろな問題がでてきました。そこで、客がこしかけやすいように、すわるところを工夫し、足をのせるふみ板を作りました。また、ゆれをふせぐために車体にばねをつけ、日おおいを自由に動かすことができるようにもしました。

こうして、工夫に工夫を重ねながら、四年あまり研究をつづけて、明治三（一八七〇）年三月、ついに、人力車が完成しました。東京府から「人力車をつかってもよい。」というゆるしもできました。三人のよろこびは、たいへんなものでした。



そのころの人々の中には、人力車を見て、「かわった乗り物だ。」  
と言ってわらう人もいました。

しかし、それまでの人を運ぶ乗り物であったかごにくらべると、  
人力車は、手がるにはやく運ぶことができます。その上、りょう金  
も安かったので、東京の町じゅうの人気をさらってしまいました。

当時の人力車の広告には、次のようなことが書かれています。

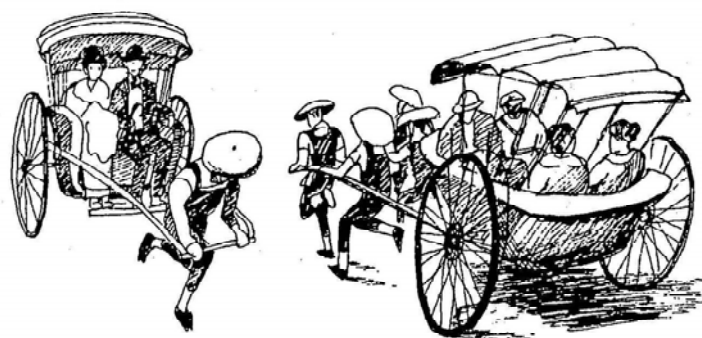
- 物のねだんの高いこのごろですが、安いりょう金で乗れます。
- 車をくふうしましたので、とてもはやく走ることができます。
- 雨や風をふせぐふうもしてあります。
- 一人で車を引くので、少しもゆれることがなく、安定していま  
す。
- 車の上から、四方のけしきを見はらすことができ、はればれ  
とします。
- 車体がひくいので、だれが乗っても落ちてけがをする心配は  
ありません。

● 一度乗った人は、何回でも乗りたいという気持ちになること  
でしょう。

その後も三人は、一人乗りの人力車から、二人、三人、四人乗りの人力車まで作り、車を五人で引くものまでつくりました。鉄の車りんは、やがてゴムのタイヤを使うようになり、しん動をいっそう少なくしました。また、車体全体に美しい絵をかいて、人々を楽しませ、したしまれるようにしました。

明治三十五年ごろには、人力車は、手がるでべんりな乗り物として、全国で二十万台も利用されたといわれています。

このようにして、国内ばかりでなく、中国、東南アジア、アフリカなどの国々にも、たくさんゆ出されました。イギリスやフランスにもゆ出され、「リキシャ」の名前で、



外国の人々にもしたしまれるようになったのです。

やがて、世の中は大きくかわり、電車、バス、タクシーなど、外国の乗り物が使われるようになりました。しかし、三人が作った人力車は、日本人の発明した乗り物として、いつの世までも語りつがれることでしょう。

出典 (港区道徳副読本のびゆくこども四年)

花と緑のまち  
(調布市)

「この花びらの色が大すき。まるで桜のトンネル。今のきせつが最高。まゆみさんは？」

まんかいの桜の花を見つめながら、はるこが言いました。

「わたしは、夏もすき。プールの帰り、木かげがすずしいんだもん。」  
「本当ね。」

「でも、だれがこんなにたくさん植えたんだろう。」

はるこことまゆみの学校は、多摩川のすぐ近くです。その川にそって桜堤通りという道があります。道の両がわには、桜の木がとなり、春になるとその花が、人々を楽しませてくれるのです。

学校の帰り、おしゃべりをしながら市民プールの前までくると、はるこがとつぜん言いました。

「山田さんのおばさんだ。」

見ると、桜の木の根もとにたてられた石碑せきひのまわりを、おばさんがていねいにそうじをしています。

（こんなところに石碑があるなんて、ぜんぜん知らなかったわ。）

「おばさん、こんにちは。この字、なんて書いてあるの？ どういういみなの？」

二人は、声をそろえたように聞きました。

そこには、つぎのように書かれていました。

## 一念

明治の氣骨 植樹に生きる

「そうねえ、わたしから話すより、中村さんのおばあちゃんの方がよく知っているわ。行って聞いてごらんなさい。」

おばさんは、そうじの手を休めて、にこにこしながらこたえてくれました。

家にかえると、二人は待ち合わせをして、中村のおばあさんのところへいそぎました。

「どうしたんだい。そんなにあわてて。」

「おばあちゃん、これ知ってる？」

石碑の文字をうつしてきた紙を出しながら、はるこが言いました。

「一念いちねん—明治めいじの氣骨きこつ 植樹しよくじゆに生きる—ああ、市民プールの前の

石碑の言葉だね。これはね、私たち明治生まれの人たちの願いなんだよ。」

「やっぱりおばあちゃんは知っていたんだ。ねえ、どういふことなの。もっとくわしくおしえて。」

まゆみは、早く話が聞きたくてしかたがないようです。

「おかしは、このまちにもたくさんの森や林があつてね。でも、ビルや家がずいぶんふえて、自然がへってきちゃったんだよ。

明治生まれの人たちが、このまちから緑がなくなりほしくないかって心配になつてね……。」

そして、次のような話をしてくれました。



今から三十年ほど前、市民が気持ちよく生活できるように、花と緑いっぱいのもちにしようと、おじいさんやおばあさんが三百人以上も集まって、植樹運動をスタートさせました。

そして、駅前公園のケヤキの木をはじめ、今までに、市内の二十三か所に四季しきおりおりに楽しめる木々を植えていったのです。市民プールの前の石碑は、桜堤通りの桜の植樹が終わったことを記ねんしてたてられたものだということなのです。

「この石碑の言葉はね、自分たちの手で、このまちをいつまでも花と緑いっぱいのもちにしていきたい、というおじいさんやおばあさんの強い願いなんだよ。」

二人は、大きくうなずきました。

「はるこちゃんやまゆみちゃんがよく遊んでいる、ほら、うらの公園のモクレンの木もそうなんだよ。」

「えっ、あの公園の木もそうなの！」

はるこが、おどろいたように言いました。

「わたしたち、いつもあたり前のように見ていたけれど、近所の

おじいさんやおばあさんにお世話になっていたんだね。」

「知らなかったことが、なんだか、もうしわけない気持ち。」

「毎年みんなでここに集まって、お花見をするんだよ。『この桜も、

大きくなりましたね。』なんて、おしゃべりをしながらね。」

まゆみとはるこには、今日、帰りにとおってきた桜の花のトンネルのかなたに、近所のたくさんのおじいさんやおばあさんが、楽しそうに花見をしているようですが、うかんでくるような気がしました。

「おばあちゃん、今度いっしょにお花見にいこうね。」

(古屋 真宏 作)

出典 (東京都教育委員会 小学校)

郷土に根ざした道徳資料集 第2集)

三河島みかわしまのつる（荒川あらかわ区）

今から三百年ほどむかしのことです。秋が深まると、三河島村（荒川区）には、北国からつるがわたってきました。

ある朝のことです。長べえが、なの花畑のあぜ道を歩いていると、せの高い草むらの中から、つるのなき声が聞こえてきます。長べえが、そおっとのぞいてみると、一羽の子づるがさかんに羽をばたつかせています。子づるは、けがをしているらしく、真っ白な羽を血で赤くそめていました。

「おお、何ということだ。のら犬にでもおそわれたのだろうか。」  
長べえは、子づるをやさしくだき上げると、家につれて帰りました。そして、父の平助にわけを話して、子づるの手当をしてもらいました。日ごろから、つるのえづけをしている平助は、手ぎわよく手当をしながら言いました。

「とんだ目にあつたものだ。もうだいじょうぶ。ううん、しかし、

これでとぶこともできまい。春までうちで世話をしてやろう。」  
こうして子づるは、しばらくのあいだ、長べえの家でかわれること  
になりました。

長べえは、来る日も来る日も子づるの世話をしました。毎日決ま  
ってもみをやり、ときには、氷のはる池に行つて、両手をまっ赤に  
しながらどじょうをつかまえて、子づるに食べさせてやりました。  
子づるのけがは、日一日とよくなつていきました。子づるも長べ  
えにすっかりなれ、長べえの足音を聞くとクウツ、クウツとなきな  
がら、えさをねだるようになりましました。

長い冬もようやく終わろうとしていきます。あたりには、つくしが  
顔を見せ始めました。つるが北国に帰るきせつです。

そんなある日のこと、長べえは、平助に言いました。

「おつとう、つるはずいぶんとおいらになついた。このままここで  
世話をしたいと思うがどうだろう。」

「長べえ、つるはな、春になると北国に帰らなければならぬ。そ  
ろそろつるをはなしてやろうじゃないか。」

平助は、ねっしんに話す長べえを見て、なだめるように言いました。「あったかくなれば、おいら、なんだってする。どじょうだって毎日とってくる。おねがいだ、つるをおかせてくれ。」

長べえは、ひっしです。平助は、おだやかに言いました。

「長べえ、どうしておまえはつるをそばにおきたいんだ。おまえはつるがすきではないのか。」

「すきだよ。すきだからそばにおいておきたいんだ。おねがいだ、おっとう。」

しかし、平助は、じっと目をとじたまま、何も言おうとしません。「もう、おっとうにはたのまねえ。おいら、一人で世話をする。」

そうさけぶと、長べえは、外にとび出しました。

あぜ道をどんどん歩いて行きました。春のまばゆいけしきとはちがって、長べえの心はくもっていました。しばらくすると、長べえは、つるの親子に出会いました。つるの親子は、楽しそうにえさをついばんでいます。長べえは、そのようすをじっと見つめています。

どれほどときがすぎたでしょう。つるの親子は、ぬけるような青空にはばたいていきました。

長べえの心もいつしかはれていました。

長べえは、おちゆうで家に走り出しました。家につくなり、長べえは、いきをはずませながら、

「おっとう、つるをはなしてやるぞ。おいら、決めたんだ。」

そう言うと、小屋へ行って戸をいっぱいにあけてやりました。子づるは、しばらく長べえをじっと見ていましたが、やがて、すっかりよくなったつばさを広げて、大空にまい上がりました。

「おうい、元気で帰れよおっ。もう、けがなんかするなよおっ。」  
長べえは、子づるのすがたが見えなくなるまで手をふりつづけました。

空は、いつのまにか夕やけにそまり、いつまでもつるのなき声がひびいていました。

(赤堀 博行作)

出典 (東京都教育委員会小学校郷土に根ざした道徳資料集 第1集)

わらじじぞう  
(世田谷区)

深沢ふかざわ小学校の前を、少し南に行くと、道が五つに分かれます。

その角に、『わらじじぞう』とよばれるじぞうさまがたっています。おじぞうさまは、世田谷区の中にも、たくさんありますが、それには、おかしから、多くの人びとのいのりやねがいがかこめられています。

このじぞうさまにも、こんな話があります。

おかし、深沢村に、与助よすけというおひやくしようさんと、八さいになるキチという親子がいました。

雄牛おうちのデコに山ほどの草をやった与助は、牛車にこえおけを積み始めました。まだ、午前三時です。

与助がデコに、



「きょうもたのおぞ。」

というど、デコは、与助に顔をよせ、フフーッと大きな鼻息はないきをたてました。

それから、与助が、

「キチ、起きな。渋谷しぶやまで乗せてってやるぞ。」

というど、キチは、あかない目を左手でこすりながら、右手でちようちんを持ち、父親についていきました。

キチが車に乗ると、四つの足に、新しいわらじをはかせてもらったデコは、ゆっくり歩きだしました。

与助は、天気のこと気がなっていました。

東の空が少し明るくなったころ、ポツリポツリと、大つぶの雨が落ちだしました。与助の牛車が渋谷のおやしきについて、下肥しもごえをくみはじめたのは、午前七時ごろでした。

帰りは、雨が本ぶりになり、道はぬかっってきました。くんだばかりの下肥が、十二のおけの中で、ゴボツゴボツと、重い音をたてて



いました。車が重くて、ぬかった道へめりこんだり、すべったりして、思うように進めません。雨が背すじまでしみとおるようになりました。

坂道にかかりました。

デコは、首を大きく、右左・右左とふり、しりを落とすし、足を開いてひっぱっています。かっと開いた目から、なみだが流れています。

そこで、与助もキチも、車の後ろへまわっておしました。

与助のわらじが切れました。与助は、はっとしてデコの足を見ました。デコの前足のひづめから血が出ています。与助は、デコのわらじをぬがせました。わらじの底がぬけ、ひもに血がついていました。

「ああ、これじゃ、新しいわらじがないと、一步も歩かせられねえ。」

牛車の四つの輪は、雨の道にどんどんくいこんでいきました。

「おれ、デコのわらじ、さがしてくる。」

キチは、かぶっていたおしろをデコの背中にかけると、急に走り

だしました。

しばらく走ると、横腹よこばらがいたくなりました。のども、ヒューンヒューンと音をたてるようになりました。

三軒茶屋さんげんちやをこえたところで、キチのぞうりがやぶれ、駒沢こまざわをすぎたあたりで、つま先がじんじんして、もう走れなくなりました。

「ちようど、じぞうさまの森だ。杉すぎの木の下にはいって、くずのつるでぞうりをなおそう。」

キチは、やぶれたぞうりを持って、森へはいりました。

大きな杉でかこまれ、うす暗くなったところに、いつもの小さなじぞうさまが立っています。キチは、ぞうりをおいて、じぞうさまに手を合わせました。

目をあけると、なんと、その足元に、牛わらじがそなえてあるではありませんか。

「じぞうさま、デコが血をふいたこと、ごぞんじだったんですか。それで、おれをよんでくださったんですか。ありがとうございま

す。ありがとうございます。」

キチは、手を合わせてお礼をいうと、そのわらじを持って、デコの方へ、いちもくさんに走りだしました。

「デコ、じぞうさまがくださったぞ。新しいわらじだぞ。」

キチは、じぶんがはだしのこともわすれ、心の中でさげびながらかけつづけました。

ぶじに家についてから、与助は、二足の牛わらじを作って、じぞうさまにおかえしをしました。

それから、このじぞうさまには、いつも、牛わらじがそなえられるようになったといわれています。



出典 (世田谷区における道徳指導資料集)

ぼくたちの多摩川たまがわ  
(調布市ちょうふし)

ぼくたちの学校は、多摩川のすぐ近くにありますが。こんど、社会科の学習で、多摩川のことを調べることになりました。

ぼくは、まず、多摩川のれきしが書かれている本を読んでみることにしました。

多摩川の水は、昔むかしから人々の生活になくてはならないものでした。田や畑に使われたり、のみ水に使われたりしてきました。

昔は、この川で鵜飼うかいをしたり、網あみで魚をとったりして生活する人がいました。また、学校にプールがなかったころには、水をせきとめ、子どもたちはそこで水泳を楽しみました。

今でも、人々は多摩川でつりをしたり、川原でスポーツを楽しんだりしています。特に夏は、花火大会が行われ、たくさんの人でにぎわいます。

ぼくは、こんなれきしをもつ多摩川が、ますます好きになってき

ました。そして、調べたことを父に話しました。

「本当にそうだね。多摩川は昔から人々にとって大切な川だったんだね。でも、さいきん川原でバーベキューをして、そのまま帰ってしまふ人がいるようだよ。」

ぼくは、その言葉がとても気になり、日曜日に友だちのまさるくんと多摩川に行ってみることにしました。

\* \* \*

日曜日、土手に立ってみると、川原ではボール遊びやジョギングなどを楽しんでいる人がおおぜい見えます。

「おや。」

その中に、ビニルぶくろを持ってごみひろいをしているおじいさんがいます。おじいさんは、草や石の間にかくれているごみをたねんにひろい集め、ふくろに入れていきます。

ぼくはまさるくんをさそって、おじいさんのところへ向かって走り出しました。

息をはずませながら言いました。

「おじいさん、ぼくたちも手伝います。」

とつぜんのもので、おじいさんはおどろいたようすでしたが、

「手伝ってくれるの。それは助かるね。」

と、わらってこたえてくれました。

きれいに見えていた川原も、近くで見ると、草の間に空きかんや紙くずがたくさん落ちています。一時間もすると、大きなふくろがいっぱいになりました。

「さあ、今日はこのくらいにしておこう。ずいぶんきれいになったね。」

おじいさんはひたいのあせをぬぐいながら、川原を見て言いました。

「三十年くらい前は、川も川原も今よりずっとよごれていたんだ。」

そのころから『多摩川をきれいにしよう』と年に一度、市民せいそうをすることにしたんだ。近ごろでは、五千人もの人が参加してトラック十何台ものごみが集まるんだ。このところ、川原で楽しむ人たちも気をつけているようで、川も川原もきれいになって

きた。いつまでも、この多摩川を大切にしておいてほしいものだね。」昔から多摩川とともに生きてきたおじいさんの話は、とても強く心に残りました。

「市民せいそうに、ぼくたちも参加したいな。おじいさん、いつやるんですか。」

「よし、ぼくたちも多摩川を大切にするぞ。」

\*

多摩川市民せいそうの日がきました。ぼくとまさるくんは、ビニルぶくろを持って多摩川に向かいました。

\*

鶺鴒うかい飼かい・・・飼いならした鶺鴒に魚をとらせる漁法

(古屋 真宏 作)

出典 (東京都教育委員会小学校)

郷土に根ざした道徳資料集 第2集)

## 岩淵水門

(北区)

荒川は、江戸時代から明治の末までの三百余年の間に、百十三回もの大洪水をおこし、そのたびに、江戸市中はどろ海になったという記録が残っています。もちろん、北区内の低地も大きな被害を受けました。

明治時代だけでも、八回もの大洪水におそわれました。特に一九一〇年(明治四十三年)八月の水害はものすごいもので、堤防が切れたのが百七十八か所、死者は利根川すじと合わせて三百六十九名、家屋全半壊・流失約千七百戸、浸水約二十七万戸であったといいます。そのうえ、水がなかなかひかなくて、十二月近くになって、やっと地面が見えてきたということです。

したがって、荒川ぞいの古い家では、水害を防ぐために、住居の土台をメートルから二メートル高くするくふうをしました。また、家ののきに小舟をつるしておいて、いざというときににげられるよ



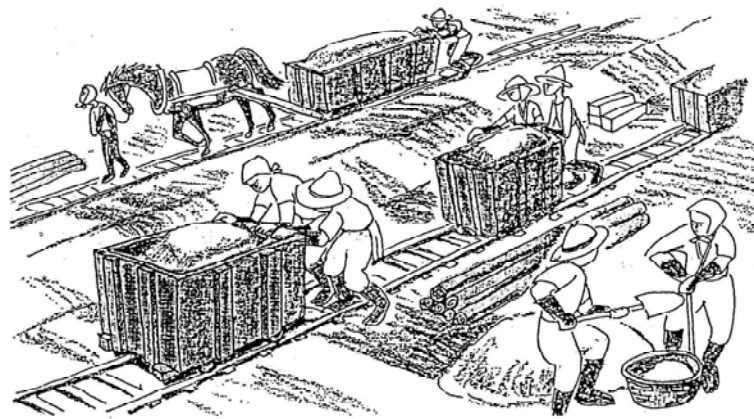
うにしていきました。

政府は、こうした大洪水をなくすために、よく年の一九一一年、荒川の流れを変える放水路工事にとりかかりました。完成するまでに十九年かかった大工事でした。

岩淵水門は、そのときの工事の一つで、一九一六年に着工、一九二四年に完成しました。たまたま、同年九月十七・十八日の大出水のときには、完成したばかりの水門の調節によって、下流地域の洪水を防ぐことができました。

この荒川放水路と岩淵水門の工事を担当したのが、主任技師であり荒川改修事務所長であった青山士あおやまあきらという人でした。

青山さんは、東京帝国大学とうきょうていこくだいがく（今の東京大学）を卒業すると、すぐにアメリカにわたり、パナマ運河を開く工事に参加しました。青山さんが、この仕事についたのは、大学時代から、自分は、人々や



社会のためになにをしたらよいかを考え続けた末、それは治水工事をすることだ、と心にちかっていたからです。

パナマ運河の工事は、暑さや病気、害虫などになやまされる、命がけの毎日でした。青山さんは、そうした苦しみとたたかいながら、七年半働き、工事の見通しがつくと、日本に帰ってきました。

帰国した青山さんを待っていたのは、荒川放水路と岩淵水門の大工事でした。

「えっ、あれが青山所長か。おれたちと同じじゃないか。」

地下<sup>じか</sup>たびをはき、まききやはんをして、みんなと同じ服を着、こしに手ぬぐいをぶら下げている青山さんを見て、作業員の一人<sup>ひとり</sup>が言いました。

青山さんは、主任技師であり所長でありながら、常に現場に出て、作業員のなかまの一人として仕事を進めました。だから作業員たちは、青山さんに親しみをもち、敬服<sup>けいふく</sup>しながら、工事にはげみました。

工事で最も苦心したのは、水門のきそとなるあなほりでした。特におぼずかしかったのは、四本の柱を立てるために、地下十八メートル

ルまでほり下げ、コンクリートづめをすることでした。

このおずかしい工事ができたのは、青山さんがパナマ運河の工事で、地下二十四メートルまでほってきそづくりをした経験によるものでした。

あなほりなどは、すべて手作業であり、土砂どしゃやコンクリートなどの運搬は、手おしトロッコや馬トロッコでしたから、たいへんでした。そのために、多くのぎせい者も出ました。

このような苦労が実り、八か年の年月をかけて、岩淵水門はみごとに完成しました。その後、荒川の洪水による災害さいがいを受けることはなくなりました。

水門近くに建てられている荒川放水路完成の記念碑きねんひには、「此ノ工事ノ完成ニアタリ多大ナル犠牲ぎせいト労役ろうえきトヲ払はらヒタル我等われらノ仲間なかまヲ記憶きおくセンガ為ためニ」とだけ記されており、責任者であり、工事の大の功労者こうろうしやであった青山士の名は、どこにも書かれていません。

(小倉 寿男 作)

心の通い合い (大島町・品川区)

一九八六年（昭和六十一年）十一月二十一日、東京都伊豆大島の三原山が大ふん火を起こし、全島民が島をはなれて、約一か月、都内の各地で避難の生活を送った。

この話は、そのとき仮の避難所となった品川区立Y小学校における人々のふれ合いのひとつコマである。

十一月二十四日、夕刻、すっかり暗くなったY小学校の校庭で、PTA役員の林田さんは、学校の先生方や品川区の災害対策の人たちとともに、大島からの避難の人々を乗せたバスが来るのを待っていた。

やがて三台のバスがとう着、つかれきった様子で九十二名の人々が校庭におりたった。人々は、三原山のとつぜんの大ふん火で、とるものもとりあえず波浮港から静岡県伊東へのがれ、あらためてこの地区の小・中学校五校を仮の避難所としてうつってきたので

ある。

その夜から、林田さんたちの活やくが始まった。

『ご縁えんがあってこの学校に来られたみなさんに、心をこめてせいっぱいのお世話を』を合い言葉に、区の担当たんとうしや者、学校の全職員ぜんしよくいん、子どもたち、そしてPTAや地域ちいきの人々が力を合わせたのである。

林田さんは、PTAの代表者として力いっぱい働いた。早朝から夜おそくまで、交代こうたいでお世話をする。とつぜんの避難で身の回りのものを整えるひまもなかった大島の人たちは、毎日の生活のこまごましたことで苦勞が多い。毎回の食事や給食室でつくるみそしるを配ること、買い物のお世話、せんたくのお世話、ほうもんしてくる人の取り次つぎぎ、そのほかのいろいろな相談など、することがたくさんある。こうした世話は、なんといいってもPTAの人たちの家庭的なふんいきが、大島の人たちの心をやわらげる。

このようにお世話を続ける中で、林田さんは、大島の人たちが自分たちに接せつするたいどに心を打うたれることがたびたびあった。何回かもたれた連らく会議で、

「なにか、ご注文はありませんか。」

という学校側の問いに、大島の代表の人たちからは、いつも、「ありません。よくしていただいで……。」という答えが返ってくる。

「すみませんね。」「ありがとう。」が、いつも学校内にあふれている。

（毛布もうふをしいた特別教室での仮住かりずまい、いつ島へ帰れるかわからない不安、けっして快適かいてきではない中で、こうした言葉があふれているのは、こちらの「思う心」と大島の人たちの「思われていること」を思う心」が、しっかりとかみ合っているからだ。）

林田さんは、心の通い合いのすばらしさをしみじみと感じた。

十一月二十九日、品川区内のせつびの整った宿舎しゆくしゃへの移転いてんが決まり、九十二名の大島の人たちはY小学校をあとにした。バスのまどというまどから身をのり出して別れをおしむ大島の人々、思わずかけよって声をかけるPTAの人たち、いっしょうけんめいに手をふる子どもたち……。

（たった六日間ではあったが、大島の人たちとのふれ合いは、わたしたちにすばらしいものを残してくれた。）

林田さんは、なみだでかすおバスに向かっていつまでも手をふっていた。

(荻原 武雄 作)

大賀博士おおが はかせを支えた人々  
(府中市ふちゅう)

毎年八月になると、いこいの森の修景池しゅうけいけいには、いろいろな種類のハスの花が咲く。

今年も直子なおこは家族と一緒に、美しく咲くハスの花を見に来ていた。

「お母さん、このおじいさん、だれなの。」

銅像に走りよった直子が、母親の久子ひさこにたずねた。

「知らないの？ この人はね、大賀博士だよ。ねえ、おかあさん。」  
姉の明子あきこがこたえた。

「だって、郷土カルタに、『に』二千年のハス、大賀博士』にあるじゃない。そうか、直子はまだ二年生だから知らないんだ。」  
そんな二人のやりとりを聞きながら、久子は、自分が、明子と同じ五年生の時のことを思い出した。

三十年前のことである。



近所の小さな家に住んでいて、見るからに貧しい身なりをして、散歩をしているおじいさんを見かけると、久子は、

「あのおじいさんは、だれなの？」

と、母親の久美子にたずねた。

「あの人はね、大賀一郎いちろうといって、世界でも有名な博士らしいよ。

なんでも、二千年も前のハスの実を、苦勞して咲かせるのに、成功した人だそうだ。」

「すごい。二千年も昔のハスが咲くなんて。でも、そんな有名な人なのに、どうして、あんなに貧しそうな身なりなの。」

久子は、久美子に聞いた。

「それはね……。」

久子の素朴そぼくな疑問に久美子は適切な答えを探しながら、内心ないしん、久子の言う通りだと思っていた。

大賀博士は、中野に住んでいたのだが、戦災せんさいにあい、焼け出されたため、府中ふちゅう市立府中ふちゅう第一だいいち小学校の裏うらあたりの小さな家に引っ越こしてきたのである。

この小さな家は、博士のお弟子でしさんや、府中のお医者さん、お菓子かし

やさんの社長さんたち有志ゆうしの方によって博士のために提供されたものであった。

ハスの花の研究一筋ひとすじで、生活には、無頓着むとんちやくとはいえ、博士の生活は、確かにはたから見てもわびしいものであった。おかずが梅干うめぼしだけの食事、その後は、パンと水だけの日々が続いた。

近所に住む人たちにも、その博士の生活の苦しさは、痛いほど伝わっていた。

そして、ついに、そんな博士の貧しい生活ぶりをみかねて、立ち上がった一人の人がいたのだ。長島富子ながしまとみこさんである。近所に住むこの人は、小島久美子さんの友人であった。

「ねえ、小島さん。このままでいいと思う。困っている人を見て、ほっといいいの、大賀博士の研究は、このままでは続けられないよ。」

しばらく黙だまって聞いていた久美子は、

「研究のことはよくわからないけど、これからも博士が研究が続けられるように、みんなに呼びかけて、お金を集めましょう。」

二人の熱意は、友人から友人へ伝わり、一か月もたたないうちに、

三百人以上の人たちから、寄付金を集めることができるようになった。

これらの人達の好意を受けた博士は、

「本当に感謝の気持ちでいっぱいです。みなさんの気持ちにこたえ、残りの人生を研究にうちこみます。また、府中の人々のためにも何か残したいと考えています。」

と言って目をうるませた。

長島さんが発起人となり、この会は、博士の研究費を支援する会として発足した。二千年のハスのように長生きして、研究が続けられるようにと「蓮の実会」と名付けられた。

その後、博士が八十二歳で亡くなるまで、この会は、二十年にわたって、博士の研究を支えることになるのである。

その間、博士は、ハスの研究にとどまらず、けやき並木の保存のための運動、国宝の研究など、思う存分自分の研究をすることができたのであるが、これも、「蓮の実会」の人々の、毎月の支援金があったればこそである。

狭い庭では満足に蓮も育てられないとのことで、大きな研究用の

鉢はちを二十鉢も用意したりもした。この鉢で育ったハスは、株分けかぶわされ、ことぶき中央公園や、総合公園の池で、今でも美しい花を咲かせている。この中には、めずらしいみょうれん妙蓮というハスもあり、府中の人々のために特別に株分けしたものだ。

「蓮の実会」は、博士が亡くなってからは、解散して今はもうないが、いこいの森にある銅像は、残ったお金で建てられたものである。

現在、府中の大賀ハスは全国でも有名だが、家を提供した「大賀会」や研究費を義援ぎえんした「蓮の実会」の存在を知る人は少ない。これらの人達は、決して自慢じまんすることはなかった。

久子は、母久美子の「大賀博士が二千年のハスのように、もっともっと長生きして、ハスの研究に専念してほしい。同じ府中に住んでいるので、大事にしてあげたいと思って始めたのよ。」と、という言葉は今でも忘れない。

「おかあさん、ほら、こっちのハスの花、すごくきれい。」

明子の呼ぶ声に、こたえるように、うす桃色ももいろに輝くハスの花を見

た。ハスの花は、実に誇らしげに咲いているように見えた。

「今度は、おばあちゃんも一緒にこようね。」

母親の久子が二人にいった。

木陰こかげに立つ大賀博士の銅像は、そんな三人をほほえましくいつまでも見つめていた。

出典 (郷土府中に根ざした道徳資料集より)

天然痘てんねんとうとたたか

（武蔵村山市むさしむらやまし）

武蔵村山の医療いりょうの発展に尽くした指田鴻斎さしだこうさい

「先生、三ツ木村みつぎの平助へいすけのところの子が亡なくなったそうです。」

「またか……。」

父、指田さしだ撰津正藤せんつのかみふじあきら詮せんは、がっくりと肩かたを落とした。数日前、湯流ゆりゅうを行い、祈禱きとうをした子で、まだ二歳さいになったばかりであった。

「湯流しもだめ、祈禱もだめ……何か天然痘てんねんとうに効きく治療ちりょう方法はないものか……。」

藤詮ふじせんは深いため息をついた。

そんな父の姿を指田鴻斎さしだこうさいは幼いころから何度も目にしていた。そして、そのたびに、家族が深い悲しみに包まれたあの時のことを思い出したのであった。

それは妹のやすが天然痘で亡くなった時のことである。悲しみにうちひしがれる家族の表情が、幼い鴻斎こうさいの記憶きおくにも鮮明せんめいに残のこっていた。妹のやすの死だけでなく、鴻斎こうさいが生まれる前には、兄二人も相次あいつ

いで天然痘で亡くなっていたことも、家族の悲しみをよりいっそう大きくした。

天然痘とは、世界的に流行した病気である。日本でも、奈良時代から明治時代の初めまで何度となく大流行した。人々は、「鬼神の仕業」とおそれていた。高熱をともなう熱病で、運良く助かっても死ぬまで顔にあとを残し苦しなくてはならなかった。犠牲者の多くは幼い子で、その治療方法としては笹湯掛け・湯流しといった民間療法しかなく、さらには神仏に祈るしかほか術はなかった。

江戸時代の末期、鴻斎の住む中藤村だけでなく、近くの村々でも天然痘によって相次いで幼い子の命が奪われていた。天然痘の患者を診るたびに、父の藤詮だけでなく、幼い鴻斎の心にも、天然痘を何とかしたいという思いが、日増しに強くなっていった。

成長した鴻斎は、父の陰陽師の仕事を手伝う日々を送っていた。多くの患者と接する中で、鴻斎は祈るだけでは治せない病気が多くあることを思い知らされていた。そして、自分の力のなさをいつも感じていた。いつしか医者になりたいという気持ちをもつようになっていった。

そのころ、天然痘に種痘（予防接種）が効果があるという話が、中藤村にも伝わってきた。江戸幕府も種痘所を開設するなど、種痘に力を入れようとしていた。鴻斎も、種痘についての情報を集め、種痘を試してみた。非常に効果があるということがわかった。

「これが広まれば、きっと……。」

だが、問題があった。人の体に注射をするには、医術の知識や技術を要するが、父の仕事を手伝ってきた鴻斎には、医術の知識や技術がなかった。

「医術を身に付けよう。」

鴻斎は、ついに医者になる修行に出た。

「よし、これからは村に帰って、医者としてがんばるぞ。」

十六年間にわたる修行を終えた鴻斎は、明治二年（一八六九年）中藤村にもどり、本格的に医者として仕事を始めた。

鴻斎は、毎日の診療にはげおとともに、天然痘予防のための種痘にも力を入れた。

明治八年（一八七五年）には、神奈川県（当時、武蔵村山は神奈川県北多摩郡村山村であった）に、種痘の懇願書を提出するなど、



種痘の普及ふきゆうに熱心に活動した。

当時、種痘をするにはお金がかかった。

しかし、鴻斎はお金のない人たちには、構わず無料で接種を行った。その数は一人や二人ではなかった。往診おうしんの際、その患者が生活に困っていると、そつと米をひとつづみ一包置いてきたりもした。

明治四十年代になるとようやく各地で村役場主催しゅざいによる種痘が着実に行われるようになった。鴻斎も、熱心に出張して種痘を行った。

鴻斎は弟子の育成にも熱心で、多くの弟子を育てた。大正四年（一九一五年）、七十七歳で亡くなるまでの四十年弱、多くの病人を救い、村山の発展に尽くした。

幕末、鴻斎ら各地の種痘医は「じんじゆつ術」を貫つらぬき、無償むしょうで予防接種に取り組んだ。



明治廿九年種痘除本會  
囑托ニ依リ中藤組合部四  
百五十四人ニ無報酬ノ以テ接  
種セラレタル段ニ交ニ謝意ヲ表ス  
明治卅年三月廿日  
北摩郡整衛會  
副會長 吉本則次

無料接種の感謝状（454人に接種）

その方針は明治維新以後も受け継がれ、地方の役所、医師たちの懸命の努力により、国内の天然痘の発生は激減した。武蔵村山市（当時は村山村）においては、昭和二十一年（一九四六年）の二件が最後となった。

（押本 明文 作）

（出典 武蔵村山市教育委員会 道徳読み物資料集 第一集より）

マネージャー  
(中野区)

ギリギリと容赦なく照りつける太陽。したたり落ちる汗。うるさいほどの蝉の声。今年もまた、夏が巡ってきた。あれから十年……。ぼくの夏の記憶は、あの日に凝縮される。

ぼくの父は中野区のY町で寿司屋を営んでいた。朝暗いうちから黙々と仕事に取り組む後ろ姿を見ながらぼくは育った。父はぼくの憧れでもあった。父にはもうひとつ顔があった。それは中野区の少年野球の監督だった。父の影響もあって、ぼくは小さい頃から野球に興味をもち、父のチームで白球を追いかける毎日だった。そんなぼくは、野球に夢中になっている少年だれもが抱く大きな夢をもつようになった。それは甲子園。東京都の予選を勝ち抜き、甲子園球場で活躍することだった。

高校進学の時が近づいた。甲子園常連のA高校にもひかれる思いがあったが、最終的には近所のB高校を選んだ。地元の仲間と

もに甲子園に行きたいという気持ちが強かったからだ。

高校に入学したら、真っ先に野球部に入部した。私と同じ夢をもった一年生が二十三人集まった。

その中に須崎<sup>すざき</sup>くんがいた。野球は決してうまくないが、礼儀<sup>れいぎ</sup>正しき、きびきびした行動、こつこつ努力する姿はチームの模範<sup>もはん</sup>となっていた。ぼくも須崎<sup>すざき</sup>くんから刺激を受け、負けるものかと一生懸命<sup>いっしょうけんめい</sup>練習に励んだ。

入部して一年が過ぎようとする頃、須崎<sup>すざき</sup>くんが監督から呼ばれた。監督は須崎<sup>すざき</sup>くんに静かにこう言った。

「チームのためにマネージャーになってくれないか。」

マネージャーという仕事は、チームの練習計画、スコア記録、用具の点検、準備等、チームにとってなくてはならない大切な役割だが、野球の練習をしたり、試合にでたりすることはできない。

須崎<sup>すざき</sup>くんは驚き<sup>おどろ</sup>を隠<sup>かく</sup>せなかった。そして震える<sup>ふる</sup>体で力無く返事をした。

「すみません。しばらく考えさせてください。」

須崎くんはこの言葉を残しグラウンドを去った。あまりに突然のことで、チームのみんなも、そして、ぼくも須崎くんにかける言葉をみつけることができなかった。

二週間後、須崎くんはグラウンドにもどってきた。真っ白いユニフォーム、明るい表情。そして、みんなにこう言った。

「いろいろ考えたけど、マネージャーの仕事をやることにしたよ。さあ、みんなで甲子園めざしてがんばっていこう。」

それから毎日毎日、須崎くんは一日も休まずマネージャーの仕事がんばった。

月日は流れ、ぼくたちは三年生になった。甲子園に向けての最後の大会、東東京大会が始まった。ぼくたちのチームは快進撃かいしんげきを続けた。しかし、シード校をあと一歩というところまで追いつめながら、逆転負けをしてしまった。夢が果たせなかったくやしい思いが涙となって頬ほおを流れた。でもその一方で、みんなで力を合わせてこんなにはずばらしいチームをつくることができるといふ満足感、達成感が心を満たした。キャプテンが突然こう言い出した。

「一人一人を胴上げしよう。」

だれが言ったわけでもないのに、みんながある人のもとへワツと集まりかっぎあげた。その人は、エースピッチャーでもなく、四番バッターでもなく、監督でもなく、マネージャーの須崎くんだった。須崎くんはスローモーションのように何回も何回も宙ちゆうを舞った。

テレビをつけると、東京大会の決勝戦が行われていた。時折ときおり、映し出されるベンチに、スコアを抱かかえた学生服のマネージャーの姿があった。

「須崎くん、ありがとう。」

ぼくは心の中でつぶやいた。

(武田 淳 作)

## 苦い映画の思い出 (葛飾区)

「今度の日曜日、友達的光彦と一緒に映画に行くよ。」と正雄は母に言った。

「何言っているの！ 日曜日は、防災訓練だって、前から言っているでしょ。正雄が小学生の面倒やお年寄りのお世話をしてくれることになっていたじゃない。」

「でも、はっきり参加するって言ってなかったじゃないか！ 僕にも友達づきあいや都合というものがあるんだよな。」

「正雄の都合もわかるけど、今回だけは参加してちょうだい。佐藤さんが防災訓練に車イスで参加したいって申し込まれてきて、実際の災害のことを考えて参加してもらおうことになったって話したでしょう。」

「佐藤さんのおじいちゃんに参加が、どうして僕に関係あるんだよ？」

「ほら、正雄が幼稚園のころ、防災訓練の途中で歩くのがいやになって泣いていたことがあったでしょう。その時、佐藤さんにおんぶしてもらって避難場所まで連れていってもらったことをお母さん思い出したのよ。それでうちの正雄も途中車イスを押しますって、自治会の話し合いのときに言ったの。」

「なんで、人にことわりもなしに勝手にそんなことを言ったんだよ。防災訓練なんか参加しないからな。」と言って、正雄は夕食の途中で部屋に引きこもってしまった。

正雄の家族は団地に住んでいる。毎年十月の中旬の日曜日に防災訓練の一環として、また団地の人達の親睦を図る目的で江戸川河川敷の柴又野球場まで歩いて避難する行事があった。この行事には、子供からお年寄りまで多くの人が参加しており、正雄も去年までずっと参加していたが、中学生になった今年はなぜかこの地区の行事に進んで参加しようという気持ちになれなかった。

ところが、今年正雄の家が団地の役員にあたり、防災訓練の担当となっていた。あいにく父が会社の都合で防災訓練に参加できず、母も役員として避難先の河川敷で仕事があるため、正雄が途中子供たちやお年寄りの面倒をみるようにと両親に頼まれていたのだ。

翌日、学校帰りに正雄は、団地の近くで車イスの佐藤さん夫婦とばったり会った。車イスを押していたおばあちゃんには、「今度の日曜日、面倒をかけることになってるいわね、お願いします。」と笑顔で話しかけてきた。

正雄は、「あゝ、実は今度の日曜日の防災訓練、僕……。」と都合があり車イスを押すことができないと言おうと

したが、なぜかはっきり伝えることができず、佐藤さん夫婦と別れた。

先日の夕食以来、正雄は母と顔を見合わせても、口もきかなかった。土曜日の朝食のとき、出張に出かける父は、「正雄、お母さんからいろいろ話を聞いているが、今回は地域の行事を優先にできないか。お父さんも何とか出張を変ってもらおうとしたのだが、うまくいかないんだ。お母さんも役員会の中で困っているんだ。」と話しかけてきた。

「お父さんやお母さんの顔を立てると、僕の顔が立たなくなるんだよ。」

「今回の防災訓練は、個人の都合だけでは成り立たない行事なんだよ。特に佐藤さんは長い間団地の役員をやられ、花壇の整備や夏の子供会、盆踊り大会、今回の防災訓練の実施など団地のために尽くされてこられたんだよ。正雄だって佐藤さんに孫のようにかわいがってもらっていたじゃないか。」

「そんなこと関係ないよ。別に僕が参加しなくても、だれかが佐藤さんの車イスを押してくれるよ。」と正雄は言った。

父は、むっとした顔をしたが、もう何も言わなかった。

その日の放課後、正雄は光彦と明日青砥駅あおとで待ち合わせることを約束した。

夜、正雄が風呂から出ると、明日の防災訓練の話らしく、母が電話に向かってしきりに謝っていた。正雄は部屋に戻ってもなかなか眠ることができなかつた。

翌日、正雄は母に姿を見せないようにして出かけようとしたが、台所から「出かけるの？」という母の声に、「うん。」としか言えず玄関を出た。

待ち合わせの場所には、もう光彦がきていた。

光彦は、正雄の顔を見ると、「あまり顔色良くないぞ。体調が悪いのか？」と聞いてきた。

正雄は、「何でもないよ。さあ、行こう行こう！」と促うながした。

しかし、劇場に入って、映画が始まって画面に集中できなかつた。

横にいる光彦はくいいるようにスクリーンを見つめ、時々大笑いをしていた。まわりからも楽しそうな笑い声が聞こえてくるが、正雄はそうした雰囲気ふんいきとは裏腹になぜか素直に映画を楽しむことができず流れる映像を見つめていた。

(小林 誠 作)

出典 (葛飾区教育委員会 葛飾区郷土資料集より)



## 車人形 (八王子市)

可也子たちの学校は、東京の八王子市の西部にある。市の人口は四十五万人を超えて、この二十年の間に高速道路が通り、南部には大きな住宅地が開発されて急速な発展が続いてきた。開発がゆっくり行われてきたこの地域にも、最近大きな道路がつくられて、ずいぶん生活が便利になった。また、可也子たちの町の奥には、豊かな自然も残されており、その自然を楽しもうとする人々も訪れてくる。週末にはハイキングや釣りにくる人々もいて、自動車の交通量が増えた。これは、最寄りの駅に通じる広い道路を望んでいたこの地域の人達にとって、予想されたことではあるけれど、悩みの種にもなってしまったようだ。

今日は秋の紅葉が一段と美しい。今朝の雨で空気が澄んでいるのだ。可也子たちの学年は、この日、地域に昔から生活している人達をグループで訪問して話を聞き、その生活を記録する地域調査を行うことになっていた。

可也子たちが訪問するのは、車人形の『西川座』であった。門を入ったところにある二つの建物のうち、右側の大きな作業場のようなところで二人の男の人が話している。小さな木切れを持って仕事の相談をしているらしい。「こんにちは。」

と、小さな声で言いながら軽く会釈をしたが、男の人達はそれには気がつかないようだった。「どうしようか。」

と、ひそひそ声で言い合ったが、班長の元信はもちろん、圭司、修もそろって何だか頼りない表情である。そこへ、さきほどの建物から着物姿の白髪の老人が現れた。

「あ、こんにちは。」  
と、いつもひょうきんな圭司が大きな声でいった。

「こんにちは。元気がいいねえ。中学校からきた人達だね。ちょうどよかった。ちょっと前に私も帰ってきたところだ。さあさあ、こっちへお入りなさい。」

玄関を入ると、広い畳の部屋のほの暗い奥には、低いけれども幕のついた舞台が見える。「さあ座って。先生から何度も電話をいただきますよ。さあどうぞ。」

と、座布団をすすめながら、男の人は着物のすそをきちんとそろえてあいさつした。「こんにちは。今日はよく来てくれました。私が西川座の西川古柳です。」

班員はこの訪問のため車人形について調べ、質問を用意してきたのだが、柔道部のキャプテンの元信もこのような場面になると勝手が違ってぎこちないようすだ。

「聞きたいことがあるんでしょ。何から先に話したらいいのかな。先に人形を見るかね。」  
と言いながら、西川さんは立ち上がって舞台の左手の仕切りになってカーテンを開けた。木製の箱のようなもの、人形のためのいろいろな衣装、小さな人形の首が静かに並んでいる。

「このあいだ君たちも芸術鑑賞教室で車人形を見たのだから、どの首を使ったか分かるでしょう。」

可也子や元信たちが見た車人形のお芝居は、日本の古典的なものとスペイン舞踊の二つだった。お芝居では、人形遣いが、後ろから一人で高さ一メートル位の人形を操る。義太夫節に合わせて人形がいろいろな動作を演じるために、人形遣いが車に腰掛けたまま舞台の上を動くので、車人形と呼ぶようになったのだ。

可也子は、最初は古くさいと思った。あらずじは分かっていたものの言葉も聞き取りにくかった。けれど、話が進むとだんだん引き込まれて、人形がいろいろな感情をまるで人間のようになしぐさで細かく表現するのでおもしろくなってきた。

「これがろくろ車。今日は、せっかく来たのだから誰かやってみるといいでしょう。簡単にはできないけれど、この人が最近習い始めたところだから、一緒にやるといいですよ。」

と言って、西川さんは背の高いスウェーデン人の女性を紹介した。半年間ここに滞在して車人形を研究しているという。彼女は、中学生たちの後ろで、気づかぬうちに座ってお茶をいれている。

「コンニチワ。ドウゾ。」

と、お茶をすすめながらまっすぐに中学生たちを見た。かしこまって座っているようすは、誰よりもきまっぴいて美しい。濃い青の瞳が言葉の壁を越えて語りかけてくる。

「おじゃましてます。すみません。」

「どうも、すみません。」

と、可也子と陽子は背筋を伸ばして座りなおした。

「ニホンノヒトオモシロイデス。スイマセン、テ、アヤマルミタイデス。」  
と、カトリーヌという女性は二人の目を見た。

「え？ ああ、そうじゃないんですけど。あの、いただきます、だね。」

今度は、可也子も陽子も苦笑いしながら、お茶でもこぼしたかのようにあわてている。

間もなく、修は西川さんに誘われて、人形を一人で動かす説明を受け始めた。修は大学ノート一冊が乗るくらいのろくろ車に腰を下ろして、ももの付け根にひもをまわして結び付けている。この車の裏には小さな前輪が二つ、大きな後輪が一つあり、前後に体重をかけることで簡単に方向転換ができる。車輪も座る部分も丈夫な櫛かじの木やひのきで作られていて、体重の重い男の人が乗ってもびくともしない。その操作は、説明されてすぐにできるものではなく、修は顔を赤くしながら、一生懸命やっている。

「人形の足の裏の木を、自分の足指にはさんで。右手は人形の右手を動かす、左手は、首と左腕両方を動かすんですよ。こうやって着物の下から入れてね。うん、急には無理だからこう持って。それから人形を座らせてみて下さい。」

隣で、素早くしたくを終えたカトリノも、同じように人形を座らせた。しばらくの間、身長一メートルほどの二つの人形は立ったり、座ったりを繰り返したが、可也子には後から加わった人形のほうが、少し『人』の動きに近いように見えた。

「実際の舞台では、せりふや三味線しゃみせんに合わせて首と両手両足を操あやつりながら舞台上を移動するのだから、大変な練習を重ねて、やっと人様に見せられるような遣い手になるのですよ。」

「あの、西川さんは何歳からやってきたんですか。」

と、可也子が聞くと、  
「さあ。物心ついた時から、かな。難しくって、一生懸命やってもなかなかほめられないでしょ。嫌になっちゃってねえ。子供のころは遊びたくて。」

「それでもずっと続けているのはなぜですか。」

と陽子が聞いた。  
「そうだねえ。人形が、人間のように見えて、感情も表現できるにはどうしたらいいかなあと試しながら、ずいぶん、お稽古けいこしましたよ。人形を思うように遣つかおうとしてたら、いつの間にか時がたってしまった。」

「あの、この人形の首はいくらぐらいするんですか。」

と、圭司が質問した。  
「三〇四万円かかりますよ。」

「へえ。こんな小さいのに。」  
「中のからくりが複雑でしょ。衣装もそろえるともっと高くなりますよ。」

「それで儲かるのかなあ。」  
と、元信がつぶやいた。

「儲かるかどうかより、私が、こうやって長い間やってきたのは、小さな人形が命をもったように動くのがおもしろいんでね。それが難しいからなおおもしろくなる。うまくきまると、お客さんの目も人形に吸い寄せられるでしょう。でも若い人にはすぐそのよさが分らないかな。今は、後を継いでくれる人が少なくなってるねえ。」

その間も、修はカトリーヌと一緒に人形を操ろうとしていた。

車人形は、日本の数ある郷土芸能の人形劇の中でも、外国で上演され、紹介されている一つである。五代目西川古柳がスペイン舞踊を取り入れた演目に挑戦してからは、広く世界にも認められるようになってきた。また世界の人形劇との交流を深めている。そのため、カトリーヌもこの八王子にやってくることになり、異国の素朴な人形芝居を学ぶことになったのだ。最初は緊張していた班員も少しずつ話に引き込まれて、時間が過ぎていった。

「さて、今日はこのくらいで終わりにしてよいだろうか。私もまだ次の予定があるので。班長さんは、誰でしたか。」  
「あ、僕。あの今日はどうもいろいろと聞かせてもらってありがとうございます。長い時間すみませんでした。」  
と、圭司。

「どうもいろいろと教えてもらって、すみませんでした。」

と、修がいつもはぶっきらぼうなのに弾んだ声でお礼を言い、可也子たちもそれぞれに西川さんの顔を見て、お礼を言った。カトリーヌが、優しい顔で修の目をのぞきながら、

「ナイトウクン、ウマクナツタネ。サヨウナラ。」

と声をかけると、「いやあ、そうでもないです。すごく難しいや、どうも、さようなら。」

と、修は下を向いてしまった。

「そうだねえ、難しい。うん、やってもやっても満足できないものだよ。じゃあ、近くにいるんだからまた遊びにいらっしやい。」

と、西川さんが言うのと、

「よし、今度は俺が挑戦してみるか。」

と圭司が答えた。可也子は、陽気な男子とはちがってまじめな顔で、

「今日はありがとうございます。」

と言ったつもりだったが、みんなの笑いにかき消されてしまったようだ。西川さんは可也子の顔を見て「気をつけ

て帰ってください。こちらの都合で、短い時間しか取れず、すまなかったね。先生にもどうぞよろしく伝えてください。」  
秋の陽はこの頃には山なみにすっぱりと隠れ、空が夕焼けで赤く染まり始めていた。

(賞雅 技子 作)

出典 (東京都教育委員会 郷土に根ざした道徳資料集第2集より)

## 焼けた空 (江東区)

江東区役所の入口に「希い」(ねがい)と題された母子像が建っています。恵子は、この前に立つと、何とも言えないやりきれなさを感じてしまいます。この像は、横山文夫作の東京大空襲の像だそう。裸の若い母親がむずがる子供を背負っている作品です。母親の瞳は恐怖に怯え悲しげで、空のほうを向いています。子供は母親の背を叩くような格好でむずかっています。これがどんな意味をもっているのか、恵子はおぼろげながら感じていました。でも、真実を知ることが怖いような気持ちがあり、調べずにずっとそのままにしています。

今年は、戦後六十年を過ぎたということで、戦争に関することを新聞やテレビで大きく取り上げています。それに、先週の社会科の授業で第二次世界大戦の学習をしたとき、恵子の住んでいる江東区を中心とした下町一体は、昭和二十年三月十日の大空襲で、壊滅的な被害を受けたことを知りました。「自分たちの住んでいる地域のことをこの機会に調べてみてはどうだろうか。」

先生の言葉に、恵子は今度こそあの像のことを調べてみようという気持ちになりました。その日の帰りに、恵子は例の像を見に行きました。像はいつものようにさみしげにやるせない表情でたっていました。恵子には、その母親の瞳が何かを訴えているように感じられました。

家に帰ると、大学の史学科に通っている兄に、太平洋戦争にかかわる資料を借りました。「江東の歴史」という本で、その中には「焼けた空」という船渡和代さんが書いた本も紹介されていました。

東京大空襲は、わずか一夜で死者推定十万人、被害者百万人という、これまでにない悲惨なものでした。そのうち、江東区は死者約八万人を出しました。市民にとっては、何一つ警戒警報も前ぶれもないのに、いきなり焼夷弾が雨あられのように降ってきたのです。木と紙でできていた下町は、焼夷弾攻撃によって一瞬にして火の海と化しました。火はおりからの風速二十〜三十メートルの北風にあおられ、この世の地獄絵をみるようでした。

船渡和代さんは、防空壕にとびこみましたが、そこにも焼夷弾が落ち、学校の窓という窓から火が吹きだし、黒煙がもうもうと渦まきました。父母や兄弟とともに公園をめざして逃げましたが、前面は火災が夜空をこがし、火の粉が降りかかってくる。四方を火に囲まれて逃げ惑ううち、「砂町へ逃げろ！」という声があり、火勢

に追われるように砂町へ向かって逃げました。

砂町に通じる橋にたどりついた時、烈風れつふうに足をさらわれた母が煙の中に見えなくなりました。父と上の兄が母を探して火の中にもぐっていききました。和代さんは他の兄と妹と一緒に防空壕にとびこみましたが、真まっ赤な炎がゴウゴウと烈風に渦まき、火の粉が中に吹き込んでいます。和代さんをかばって身をふせていた稔みのる兄さんが突然「ワーッ」と声をあげて防空壕をとびだしました。

「稔みのるッ！」と叫んで次の兄が立ちあがりましたが、二人とも吹きとばされました。

妹と二人だけになった和代さんが、火勢がおとろえたので防空壕から出て立ちあがった時、息をのみました。街は見渡すかぎり燃えつきていました。橋の下の川にも熟さに耐えかねて飛びこんだ人びとが重なりあって死んでいました。

『江東の歴史』より

食い入るように本を読んでいる恵子に、

「恵子が気にしている銅像のことも出ているだろ？」

と言って兄は、ポンと肩をたたきました。

恵子は、おそろおそろ次のページをめくりました。

深川の辺りにいきなり火の手があがり、住民は防空壕の中にうずくまりました。そこにB29がゴ—とやってきて直撃の焼夷弾が落ちてきました。火が人波に渦巻いてみんな火だるまです。「川へ逃げよう」という声に、大勢の人が橋からこぼれ落ちそうで、その上に火の粉が降りかかります。その中に、小さな子供の手をひいた母親が、火に追われて走っていましたが、その上に突風が火と煙をまきこんで、旋風つむじかぜみたい舞い上がりました。何人もの子供がその旋風に吹き飛ばされ、バラバラと川の中に落ち、母親がものすごい声で叫んでいました。子供をおぶった母親が、周りの人に子供の様子を見てくれというので、見ると、赤ん坊は煙にまかれて窒息死ちっそくししていました。その瞬間、火の粉だけの突風がおそい、ふりかえると、その母親は死んだ子供をおぶったまま、川の中に落ちていました。

『江東の歴史』より

ここまで読んで、恵子は胸がつかまってしまいました。

「どうした、恵子。大丈夫か？」

うつむいてしまった恵子に、心配そうに兄が声をかけます。

「だって、私と同じようにこの土地に住んでいた人たちが、一瞬のうちに兄弟を失ったり、母子ともに火の海に飲まれたかと思うと、なんともいえない気持ちになって……。」

「今の僕たちには、想像もできないことだね。」

「どうして船渡さんは思い出すのも嫌な恐怖の体験を本に書いたのかな？」

「辛く苦しい悲惨な体験だったからこそ残さなければと考えたんじゃないかな。」

「どういうこと？」

「船渡さんの生き方が反映されているんじゃないかな。」

「生き方？」

「つまり、恐ろしい体験を本にまとめることで、自分が生きてきた証を残したかったんだと思う。」

「じゃあ、その証を受け取った私たちは何をすればいいんだろう……。」

恵子は、そのまま黙り込んでしまいました。

翌日から、恵子は区の資料館や図書館で当時の地域の様子について調べ始めました。図書館の窓から外を眺めると近代化されたビルが立ち並び、当時の面影を残すものはなくなっています。一夜にして何十万人という尊い生命を奪った東京大空襲。こんな悲劇は二度と繰り返してはなりません。

「現代に生きる私たちは船渡さんの心を受け継いでいかなければならないと思う。」

ぼつんとつぶやいた恵子の隣に、いつのまにか兄が座っていました。

「まずは、このような悲惨な戦争を再び起こしてはいけないということだよ。」

「そうね、兄さん。そのために外交やそのほかの戦争を防ぐ手だてを考えていくことが大切ね。」

「一人一人の生命を軽視することから戦争が起きるといって考えから、ユネスコの精神の中に『戦争は人々の心の中にある』という言葉があるよ。」

「自分の命とともに友達の命も大切にしていくなのね。そして、世界中のどの国でも安心して生活ができるために安全で平和な社会を築いていかなければならないのね。」

「今の僕たちに考えられることはこれ位だけ……。」



「でも、まだまだ私たちにできることがあるかもしれないわね。」  
いつも気になっていた母子像から端<sup>たん</sup>を発してあれこれ考えてきたけれど、恵子は今ようやく本当の母子像に出会った気持ちになりました。

出典 (東京都教育委員会 郷土に根ざした道徳資料集第2集)  
(坂口 幸恵 作)

## 甘い小松菜 (江戸川区)

「また野菜を残して。」

耳元で母の叱る声が響きます。

「だって、青臭くて嫌なんだから。」

由美は言い訳をします。そうです。由美は野菜嫌いなのです。

先日も、学校で栄養士の先生から「食育について」という話がありました。

「先日の小松菜の油揚げの煮浸しの献立も、みなさんに味わってもらおうと工夫しました。小松菜は成長期のみなさんに必要なビタミンがたっぷり含まれています。小松菜などの野菜をしっかり食べ、バランスよく食事をしましょう。」

と言っていたばかりでした。由美だって理屈では理解できるのです。

それでも由美は食べたときのあのほろ苦さや青臭さが、どうしても我慢できなくて、つい残してしまうのです。

「お母さんの手料理は残さず食べることに。これが我が家のルールですからね。」

また母の口癖「我が家のルール」が始まりました。由美は知らん顔を決め込みます。

「お姉ちゃんはちゃんと食べるのに、由美は好き嫌いが多くて困るわ。」

母の小言は続きます。

「食べるわよ。食べればいいんですよ。」

吐き捨てるように由美は大声を出したかと思うと、小松菜のお浸しを口の中に押し込みました。

部屋に戻って、由美はぼんやり考えていました。そして、放課後の、春江と今日子とのやりとりを思い出していました。

明日からは、職業体験学習で五日間、江戸川区の農家に行くことになっています。放課後の打ち合わせでも、「嫌いな小松菜の世話にわざわざ行くなんて。私はできるだけ楽な仕事にしてね。」と、由美は友達に八つ当たりしてしまいました。

「小松菜の世話に行くの。食べるんじゃないのよ。」

春江が言います。

「仕事は公平にしなくちゃ駄目よ。」

今日子も口をそろえます。

「話し合いで決定する。これが私たちの班のルールでしょ。」  
と、さらに春江が付け加えます。

「ルール、ルールって何よ。とにかく、嫌なものは嫌なの。」

吐き捨てるように由美が自己主張すると、

「ルールを無視する人は、班員失格ね。」

と今日子からも言われてしまいました。

帰宅すると由美はパソコンに向かいました。

(小松菜って私たちが住んでいる江戸川区の特産だって栄養士の先生が言ってたっけ……)

江戸川区の栄養士さんたちが協力して、区の特産である小松菜の献立を開発し、給食に取り入れられている。このことは去年の新聞にも記事になって出ていた。特産品でありながら、市場から全国各地に出荷されてしまったため、実は区民の口に入る小松菜は他県産がほとんどという現状でした。そこで、栄養士さんたちが「地産地消」を合言葉に協力し、農家やJAと直接取引することで実現したものでした。新鮮な地物を使った献立は生徒にも保護者にも好評です。栄養士さんの工夫で、あの苦い小松菜を美味しい小松菜ケーキに変身させてくれてもいるのです。

由美は、インターネットで「小松菜」を検索してみます。

私たちの食卓ですっかりおなじみのコマツナ。漢字では「小松菜」と書きます。江戸川区小松川の地名から付けられた名前です。今では年中食べることができるとこの小松菜も、もともとは冬のもので、お正月のお雑煮には欠かせない野菜でした。それで昔は「冬菜」と呼ばれていました。

(ふーん、今ではいつでも食べられる小松菜にも旬の季節があったって訊ね…。冬の野菜だったなんて知らなかった。)

また、ネット上には、野菜作りの達人たちの顔写真が出ていました。その中に、由美が通う中学校の給食に食材を納品している島田茂しげるさんの写真も載っていました。

(この人が、毎日、私たちが食べている給食の小松菜を作っている人か……。)  
次々に検索していると、小松菜の歴史も分かってきました。

江戸時代、將軍徳川吉宗が、鷹狩りの際、小松川にある神社に立ち寄ったときに、神主が、餅の澄まし汁に小松菜を入れて差し上げたところ、將軍はとても喜んでこの青菜を小松菜と命名したという逸話があります。

(將軍吉宗がこんなに褒めた野菜なんだから、食わず嫌いをしているのが損をしているような気がしてきたわ。)  
由美は、少しだけ小松菜に興味がわいてきました。

翌日からはいよいよ職業体験で農家の畑へ向かいました。

「ようこそ、小松菜畑へ。」

笑顔で農家の島田さんは迎えてくれました。

島田さんは、小松菜の原産地が南ヨーロッパであることや、それが中国を経て我が町江戸川区に伝わったのは鎌倉時代のことだと話してくれました。当時の小松菜は、味も色も違っていたそうです。それを何回も品種改良して、現在のようないやよいやおいしい小松菜にしてきたと言っていました。

「農家の方たちの苦勞も知らないで、由美ったら青臭くて嫌だって言うんですよ。」

今日子が、つい島田さんに口を滑らしました。

「そうそう、由美は野菜は何でも残すの。一昨日の給食で小松菜ごはんが出たときも、小さな小松菜を一つずつよけて食べてたんですよ。その上、今日の取材も、自分の嫌いな小松菜の世話なんて嫌だとだだをこねてたんですよ。」

春江も付け加えます。

「いえ、そんなに大嫌いというわけではなくて……。」

由美は真っ赤になってしまいました。

「いいんだよ。誰だって美味しいものが好きなんだ。野菜嫌いは由美さんだけではない。だからこそ僕たち農家の人間は、どうしたら美味しい野菜になるか日々努力してるんだ。試しに、明日は朝のとりたての小松菜をごちそうしよう。」

と、小松菜の本当のおいしさを味わってほしいと島田さんが由美に話しかけました。

由美は明日の朝の小松菜の味を想像してなんだかわくわくしてきました。

翌朝、由美は早起きをしました。小松菜畑に行くのが待ち遠しくて仕方ありませんでした。朝日に小松菜の葉の朝露あきつゆが輝いていました。島田さんは、もう作業をしていました。三人の中で由美が一番乗りでした。

「おはよう、由美さん。早速小松菜を味わってごらん。」

島田さんが差し出した小松菜の葉を一枚口に含みました。

「甘い。」

思わずこの言葉が口から出ました。由美が今までに味わったことがない、甘く瑞々みずみずしい味がしました。

「この味はね、僕たち江戸川区の農家の青年部が協力し合って産み出した味なんだよ。決して手間を掛かけることを惜おしんではいけない。どの農家が得をするかとか、損得を持ち出したら失敗してしまうんだ。」

「どういうことですか。」

由美が質問します。

「誰かが自分の利益ばかりを考えて、早出しはやだしの出荷で自分の畑の収穫をしてしまうと、他の農家の利益を減少させてしまう。また、その時は得をしても、長い目で見るとむしろ損になってしまうことだってある。だから、みんなが決めたルールを守ることが基本になる。そして、それぞれが自分の役割を果たし、協力し合っていくことが大切なんだ。」

島田さんの言葉に由美ははっとしました。自分の事ばかり考えて、春江や今日子に文句ばかりを言っていた自分が恥ずかしくなりました。

顔を上げると向こうから、春江と今日子が眠そうな目をこすりながら小松菜畑を目指して走ってきます。

島田さんは、江戸川区の特産を継承していくための苦勞を語りながら、地域の人たちと協力していくために自分の義務をきらんと果たすことの大切さも教えてくれました。甘い小松菜を味わいながら由美は、学級の一員として、きちんとルールを守ることの大切さを理解し、これから自分が果たすべきことは何かについても考えてみようと思いました。

(坂口 幸恵 作)

## 御蔵島の心 (御蔵島村)

御蔵島は、地底のマグマの力がそのまま海上に突き出したような、力のこもった姿を太平洋に見せている。冬でも温暖なこの島には常緑の照葉樹林がたいへん豊かに生い茂り、人々は水に不自由したことがない。しかし、台風の威力は時に島の木々をなぎ倒し、冬の『にし』と呼ばれる風は厳しい自然とともにあることを村人たちに教える。この島の周囲にイルカが現れ、灰色の背中を見せて泳ぎ回るのもまた、島の人たちに欠かせない自然の一つである。

江戸時代の末の六月のある朝、幕府の支配下にあったこの島の人々の目の前に現れた黒船バイキング号は、自然ならぬ人間のもたらした脅威だった。霧深い中に、海から何やら知れぬ人の声が今まで耳にしたこともない口調で、危機に迫られた叫びとわかるようすで、聞こえてくる。島の地役人(村長)であった加藤伊賀守を始め、村役人たちが薄明に姿を現した船の大きさに恐れおののいたのは、吹き荒れる台風以上のものであった。若い栗本一郎も、その中の一人だった。

陽が高くなって遭難のようすは島から歴然とわかるものとなり、海に生きる者なら、どのような結末になるか想像することはたやすかった。

「いったい、どのようにすれば良いであろう。」

「それは、幕府に伺いをたてて、救援の船を出すべきものかどうかを尋ねた上でのことでしょう。」

「しかし、いったい何という船であるのか、それもわからない。」

一郎はただその大きさにあきれればかりであったが、ふと、船体に記した横文字も判読できないわが身に気づき身震いした。

あれが外国の文字か、と一郎は心の中でつぶやいたが、

「このまま沈むのを見過ごす訳にはまいりません。助けてあげねば。」

と、思ったことは別の言葉が口を突いて出た。一郎の言葉に振り返った加藤伊賀守は、

「ただ沈むのを見ているつもりはない。が、異国の船は下田と神奈川以外には上陸できぬ。そのため、夷人が来たら追い払うための武器までお預かりしているのだ。」

村の男たちが集まって協議したが、今までに漂流者を助けたのとは余りにも違うので、何も話はまとまらなか

った。一郎は、たとえ異国人であっても困っている人を助けよう、と訴えた。中国人が乗っているらしいので何か話ができるだろう、とも言った。多くの人は乗員があまりにも多いのと、船の大砲たいほうに疑いをもち、助けることに反対した。しかし、とにかく、船のようすをうかがうために一郎と村の若い衆が小舟で状況を見に行くことになった。小舟をこぎだすと船上の人々が興奮して叫ぶ声が聞こえてきた。その時に、一郎たちに向かって手紙を包んだ小石が投げられたが、それもむなしく海に沈んでしまった。

島民もまた、黒船がこの島を乗っ取りに来たと騒ぎ出すほどで、島は混乱を極めた。

一郎は、黒船の遭難どころか、島の遭難であると感じた。何とかこの困難を切り抜けないと、御蔵島の人々が船上の大砲で一撃されて無残な目に遭あってしまわないかと、一郎は新たな恐怖に畏おそれおののいた。救援の手を差し出さない島の人たちに対して異国の人たちが挑いどむように上陸して、混乱を大きくすることもあるだろう。幕府から渡された鉄砲てつぱう五丁と槍やり二本で、この事態がどうにかなるものではない。船上の二門の大砲が、黒く鈍にぶく光っている。いろいろな思いが一郎の心を駆けめぐった。

しかし、なおも一郎は小舟をこぎだし、黒船の人々と連絡をとる努力を続けた。そのうちに、船内の中国人が板切れに書いて投げてきた漢文を読み、中国人が四百六十名、アメリカ人が二十三名乗っていることがわかった。またアメリカの船で、この中国人を鉾山の労働者として送り届ける途中であるようすと、

「もはやこの船は航海できない。けっして敵意はない、何とか救ってほしい。浸水しんすいがひどくて積み荷も崩くずれている。」ということがわかった。幕府の指示を待つまでもなく、救助すべき時が今であることを悟さとった一郎は、黒船を救うことは島を救うことになるのだと、加藤伊賀守を説得した。さらに島民を浜に集め、一郎は次のように皆に訴えた。「見てのとおり、あの船は沈むのを待つばかりである、皆も分かんと思う。乗組員や船中の中国人を島へ上陸させたいと思う。」

「しかし、船の中には島の人間よりもたくさん人がいるというじゃあないか。」

「だが、見殺みころしにはできない。互いに海に生きる者だ。助けることに異存いそんはないだろう。」

「言葉も通じないのに。いったい、この島に来て好き勝手なことをされたらどうする。」

「そうだ、力のない女や子供はどうする。おれは反対だ。」

「みんな、よく聞いてくれ。同じ海で、私たちが遭難した時、異国の浜で救われたらどうか。言葉など問題ではないだろう。私たちが、今できるかぎりの手助けをすることは、当たり前のことだ。」

「しかし、この私たちがさえ食糧しょくりょうに不自由しているのはお前さんだって分かっていようが。」

その頃、御蔵島は、黄楊つげの木を売って貴重な収入としてきたが米はとれなかった。人口が増え過ぎぬように、次男三男は結婚できないおきてを作り、食糧難を乗り越えてきた。

「誰だれのためでもない。この島を守るためにも、あの人たちを助けて援助を待つ間、浜辺だけでも貸してあげることだ。この浜から続く海はあの船に乗った人たちの故郷にもつながっている。戦いをしかけてくることはない。」

一郎は必死の思いで訴えた。

「ここに浜があつて上陸もさせないとは、俺たちのご先祖さんにも申しわけがねえ。」

人々の心は次第に漂流者たちを受け入れる気持ちになつた。

やがて乗組員が、上陸して浜に野営することになつた。島の子供も年寄りも、遠くからではあるが興味深く中国人の会話や英語の発音を世にも不思議な思いで聞くようになった。漂流者たちが固い岳の中から、何かをおいしうに食べるのも村人には不思議なことだつた。村人が近くの浜に流されたたった一つの缶詰を拾って届けたことを、「御蔵島の人たちは非常に正直で感心した」と、彼らは日記に残している。

一郎のこの時の働きと、島民の心からの救援活動に、中国人やアメリカ人だけでなく下田のアメリカ領事も、大いに感謝した。バイキング号が座礁して五日後、救援のワイオミング号が到着し、ほとんどの者は、無事にアメリカに向かった。バイキング号の解体処理のために御蔵島に残ったアメリカ人と一郎たちは交流を深め、その時に一郎が会話するために苦心して作った英単語帳が残っている。この英単語帳は、とどころどころにアメリカ人が書いたアルファベットもあり、その意味と発音を鉛筆や筆で書いたカタカナ混じりの小さなノートである。歳月を経て薄茶色ちやいろになつたノートが、栗本一郎の向学心や熱意の一端を伝えてくれている。

この後、一郎は地役人になり、島の古い制度の改革に取り組み、養蚕ようさんの技術の習得や教員の養成のために、島の若者たちを積極的に島外で学ばせた。また、黄楊の生産を増やすために植林を徹底し、防風林として村の周囲に松の植林を奨励した。そのため、御蔵島は明治中期ころには伊豆諸島でも経済的に豊かな島になり、本州との定期船がいち早く通うようになつた。

(賞雅 技子 作)

出典 (東京都教育委員会 郷土に根ざした道徳資料集第2集)



## 第二章 郷土資料の活用

とうふや 八べえ (文京区)

一 ねらい

うそやごまかしをしないで、明るい心で生活しようとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

・本資料は、文京区小石川に伝わる民話を基に創作されたものである。

・きつねの行為を通して自分の不誠実さに気付く八べえから、うそをついたり、ごまかしたりすることは、周りの人々に迷惑をかけるばかりではなく、自分自身の気持ちもすっきりしないことに気付くようにしたい。

・きつねの姿から自分の不誠実さに気付いたのは八べえの良心である。自分の良心に従って、明るく生活しようとする八べえに共感し、正直に生きることの大切さを感じることができるようにしたい。

三 指導上の留意点と工夫

・とうふは、江戸庶民の好物であり、とうふ売りやとうふやが売っていたことにも触れておきたい。

・学習活動2では、登場人物八べえの気持ちを考えることで、自分の感じ方や考え方を表現できるように導いていく。

・学習活動3の自分の生活を振り返る活動では、時間を十分取り、大切に扱いたい。じっくりと考えられるよう、ワークシートに書かせることも有効である。

学習活動	指導上の留意点
<p>1 うそをついたり、ごまかしたりした経験について話し合う。</p> <p>○ うそをついたり、ごまかしたりしたことはあるか。</p>	<p>・正直、誠実にかかわる体験を思い出し、資料への導入を図る。</p>
<p>2 資料「とうふや 八べえ」を読んで話し合う。</p> <p>(1) 八べえは、どんな気持ちで小さなとうふを作り始めたのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ おおもうけしてやるぞ。</li> <li>・ 少しぐらい、ごまかしたっていいじゃないか。</li> <li>・ おきゃくさんには、わからないだろう。</li> </ul> <p>(2) 木の葉を入れたのが、助けたきつねだとわかったとき、八べえは、どんな気持ちだったか。</p> <p>(3) かなしそうに小さなとうふを手にしたきつねにじっと見つめられて、八べえはどんなことを考えたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 人に迷惑をかけてきた。</li> <li>・ ごまかしたわしが悪かった。</li> <li>・ もとのような大きいとうふを作ろう。</li> <li>・ 気付かせてくれてありがとう。</li> </ul> <p>(4) もとのとうふを作って、よろこばれるようになった八べえの心の中はどうだったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 正直にやることは気持ちがいいな。</li> <li>・ もう、ごまかしたりしないぞ。</li> <li>・ みんなに喜ばれてうれしい。</li> </ul>	<p>・ ごまかそうとするときの気持ちを考えさせる。</p> <p>・ 八べえの驚きや疑問に共感できるようにする。</p> <p>・ ごまかしてきたことの不誠実さに気付いたときの心の中を考えさせる。話し合う中で様々な感じ方や考え方に気付かせるようにする。</p> <p>・ うそやごまかしをしないで、正直、誠実に行うことの気持ちよさに気付かせる。</p>
<p>3 自分の生活を振り返って話し合う。</p> <p>○ 今までに、うそをついたりごまかしたりしないで正直に行動したことはあるか。それはどんな気持ちからか。</p>	<p>・ 正直、誠実にかかわる体験について自分がどんな気持ちや考えで行動したのかを振り返る。</p>
<p>4 教師の説話を聞く。</p>	

たま川の夕日（世田谷区）

一 ねらい

困っている人に、やさしく親切にしようとする態度を育てる。

二 資料選定の理由

・昔、多摩川には橋がなく、たくさんの渡し場があった。現在の二子玉川あたりの渡し場の船頭と、二匹の鯉の話で、低学年の児童の好きな昔話である。

・渡し場の船頭の三吉じいさんは、困っている人や苦しんでいる魚を、放っておけないやさしい温かい気持ちをもっている。児童がその気持ちを知ること、児童自身もそのように生きたいと願う気持ちをもつであろう。

三 指導上の留意点と工夫

・資料の中に出てくる難しい言葉について、わかりやすく話す。（例えば、キセル、さかなの精、よどみ、がんくびなどの言葉について説明する。）

・多くの絵を用いて児童のイメージを豊かにする。（例えば三吉じいさん、さかなの精、苦しんでいる魚、キセルの絵など）

・やさしくしたり、親切にしたりした後の気持ちを聞く。

学習活動	指導上の留意点
<p>1 人にやさしくしてもらったり親切にしてもらったりしたことを聞く。</p> <p>○ 人にやさしくしてもらったこと親切にしてもらったことがあるか。</p>	<p>・児童が生活を振り返る際の手がかりになるように板書する。</p>
<p>2 資料「たま川の夕日」を読んで話し合う。</p> <p>(1) 三吉じいさんは、魚の精に「おたすけください」と言われたときどんな気持ちだったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ かわいそうに、たすけてあげたい。どうしよう。</li> </ul> <p>(2) 三吉じいさんは、魚の精の夫のいるよどみを見たときどんなことを考えたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 私は、年だからもう潜れない。</li> <li>・ こわいな、どうしよう。</li> </ul> <p>(3) 大きな太いつりばりを飲み込んだ魚を見たとき、三吉じいさんはどんなことを考えたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ どうしても助けてあげたい。いい方法はないかな。</li> <li>・ かわいそうに・・・早く助けないと死んでしまう。</li> </ul> <p>(4) よどみの外まで無事に送りだされた三吉じいさんは、どんな気持ちだったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ よかった。いい気持ちだな。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 三吉じいさんの心の動きが明確にわかるようにする。そのために、変わる心の様子がわかるように板書する。</li> <li>・ 三吉じいさんの気持ちを想像できるようにする。</li> <li>・ 三吉じいさんの考えたことをワークシートに書く。困っている魚に対する思いやりにかかわる多様な感じ方、考え方に会えるようにする。</li> </ul>
<p>3 自分の生活を振り返って話し合う。</p> <p>○ やさしくしたり、親切にしたりしたことはあるか。そのときどんな気持ちだったか。</p>	<p>・ 今までの体験を振り返り、多くの児童が発言できるようにする。</p>
<p>4 教師の説話を聞く。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 幼い子やお年寄りに優しくした子どものころの体験や、最近心に残っている幼い子やお年寄りに親切な人の話をする。</li> </ul>	

やまめの やまちゃん（青梅市）

一 ねらい

身近な自然に親しみ、動植物にやさしい心で接しようとする心情を育てる。

二 資料選択の理由

・現代は都市化の進行や生活スタイルなどの変化により身近な自然に親しむ機会が少なくなっている。低学年の児童にとっては、日常生活で動植物とのふれあいや飼育や栽培などの体験を通して、やさしい心を育てることが求められる。生命あるものとのふれあいを通した体験を積んでいくことが生命尊重の心をはぐくむ基礎となる。自然との出会いを通して、動植物の成長の不思議さや感動を味わわせたい。

・山間部の水のきれいな所に住むヤマメは「溪流の女王」と呼ばれていて、水の汚れや水温の上昇に弱い魚である。青梅市では、「やまめの里親教室」といって卵から稚魚を育て多摩川に返すという活動を行っている。平成十七年度は、市内五校（千人）が実施した。

三 指導上の留意点と工夫

・導入では、「やまめの里親教室」の様子や卵、稚魚の写真などを提示して興味をもたせたい。  
 ・自分の生活を振り返る場面では、「こころのノート」四八〜四九ページを参考にして「みんないっしょけんめいに生きているよ。」をキーワードとして考えさせる。

学習活動	指導上の留意点
1 自然や動植物とのかかわりについて話し合う。 ○ 今までに生き物の世話をしたことがあるか。 ○ そのときの気持ちはどうだったか。	・生活科などの授業中の写真を提示する。
2 資料「やまめの やまちゃん」を読んで話し合う。 (1) どの場面が、一番心に残ったか。 ・ しゅう君がやまちゃんとお話しているところ。 ・ しゅう君がやまちゃんを多摩川へ返すところ。 (2) やまちゃんを育てているときのしゅう君はどんな気持ちだったか。 ・ かわいいな。早く大きくなってね。 ・ 水をかえるよ。えさもちゃんとあげるよ。 (3) いよいよ、やまちゃんを多摩川に返すときのしゅう君はどんな気持ちだったか。 ・ また会おうね。 ・ 元気に育ってね。	・やまちゃんの成長していく様子がわかるように場面ごとに絵や写真を提示していく。 ・ワークシートを活用して、しゅう君がやまちゃんを大切に育てようとしている気持ちに共感させる。 ・動植物に対するやさしい気持ちの多様な感じ方、考え方に会えるようにする。
3 自分の生活を振り返って話し合う。 ○ これまでに、しゅう君と同じようにやさしい気持ちで生き物の世話をしたことがあるか。 「みんないっしょけんめいに生きているよ」をキーワードに考えさせる。	・「こころのノート」を活用して考えさせる。 ・日記や作文、学級の係の活動場面等から考えさせる。
4 教師の体験談を聞く。(例) ・ 飼育小屋で生まれた赤ちゃんうさぎは目が不自由だったので、高学年のお兄さんたちが教室で大切に育てている。ポッチャンという名前がついて今ではまるまると太って元気いっぱいである。	

かっぱと 与助(北区)

一 ねらい

生きることを喜び、生命を大切にしようとする心情を養う。

二 資料選定の理由

・本資料は、北区の岩淵にある静勝寺に伝わる話である。子どもたちにとっては身近な郷土を素材にした資料であるために、資料に対して興味をもって取り組むことができる。また、生命の大切さを感じさせるためには、生命が、多くの人たちに支えられ、守られていることにも目を向けさせる必要がある。この資料は、自分の身近な郷土でかっぱの生命を大切に話であり、かけがいのない生命を大切にしようとする気持ちを養うことができる。と考える。

三 指導上の留意点と工夫

・「かっぱ」については、子どもたちがよく知っている想像上の生き物で、資料に対して興味をもって取り組むことができる。しかし、展開でかっぱのことを深く扱うと、3―(1)の動植物愛護になってしまい、ねらいからはずれてしまうため、あまり深入りしないようにしたい。また、導入では「生命」に視点を置き、「生命尊重」に意識を向けるようにさせたい。展開前段では、与助の気持ちに共感させながら、生命にかかわる多様な価値観を引き出し、展開の後段では、生命を大切にされた経験を振り返らせ、今までの自分の行為がどうであったのかを自覚させたい。

四 展開例

学習活動	指導上の留意点
<p>1 生命について話し合う。</p> <p>○ 自分の生命を助けてもらったことがあるか。</p>	<p>・家族などに生命を助けてもらったことなどにふれ、ねらいとする価値の方向付けを行う。</p>
<p>2 資料「かっぱと 与助」を読んで話し合う。</p> <p>(1) 男の子が倒れているのを見て、与助はどんなことを考えたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ どうしたのだろう。すぐに助けてあげなくては。</li> <li>・ 大変だ。助けを呼ぼう。</li> </ul> <p>(2) かっぱの子どもでもあったとき、与助はどんなことを考えたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ かっぱは怖いから、すぐに逃げよう。</li> <li>・ かっぱでも死にそうになっているので助けてあげよう。</li> </ul> <p>(3) 与助は、何回も何回も水をかけながら、どんなことを考えたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 早く元気になってほしい。</li> <li>・ 水をかけてもダメなのかな。他の方法で助けてみよう。</li> <li>・ もう助からないかもしれない。</li> </ul> <p>(4) かっぱの子どもが元気を取り戻したとき、与助は、どんな気持ちだったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 助かってよかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 男の子が倒れているのを見て、助けてあげたいと思っている与助の気持ちに共感させる。</li> <li>・ かっぱであっても生命を助けてあげようという気持ちに共感させる。</li> <li>・ 生命を大切にするために、与助がいろいろと考えながら水をかけていることに共感させ、多様な感じ方や考え方に気付かせる。</li> <li>・ 生命が助かったときの満足感や安心感に共感させる。</li> </ul>
<p>3 自分の生活を振り返って話し合う。</p> <p>○ いままで命を大切にしたことや、大切にできなかったことはあるか。そのときどんな気持ちだったか。</p>	<p>・ 今までの自分の行為を振り返り、生命を大切にできた自分やできなかった自分に気付かせる。</p>
<p>4 教師の話聞く。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 命の大切さを感じた体験談を語り聞かせる。</li> </ul>	

たのしい 一日 (日野市)

一 ねらい

父母、祖父母を敬愛し、お互いに助け合い家族の役に立とうとする態度を養う。

二 資料選定の理由

・ 児童の道徳性が育つ基盤には、父母や家族の人たちの生き方や教育が大きく影響される。日々の家庭生活が家族の心づかいや努力の上に成り立っていることを児童に気付かせるとともに、家族の一員としてできることは積極的にし、家族や家庭を愛する心を育てることが求められる。

・ 祖父と一緒に楽しみにしていた動物園へ出かけることになる。出かけるとき母に祖父への気配りを頼まれる。しかし、多摩動物公園にはいろいろな動物がいっぱいいてつい夢中になってしまう。チンパンジーを見るために人だかりになっているところで、祖父はひたいに汗しながら助けてくれた。主人公の気持ちの変化や思いにふれ相手の気持ちを考え自分が行動することを気付かせたい。

三 指導上の留意点と工夫

・ 場面絵を用いて児童のイメージを豊かにする。  
 ・ 優しくしたり親切にしたりした時の気持ちを聞く。  
 ・ 動作化を取り入れ登場人物の気持ちを考えやすくする。

学習活動	指導上の留意点
1 家族にやさしくもらった経験について話し合う。 ○ 家の人にやさしくしてもらったことはあるか。	・ 今までの経験を思い出させる。 ・ 板書する。
2 資料「たのしい 一日」を読んで話し合う。 (1) 「けいすけ、さかみちがおおいからゆっくりあるくのですよ」といわれたときどんな気持ちだったか。 ・ ゆっくり歩いてあげなきゃ。 ・ 動物園楽しみだな。 (2) 多摩動物公園について動物を見て回っているとき、どんな気持ちだったか。 ・ いろいろな動物が見たいよ。 (3) おじいちゃんがうしろからだきあげてくれたとき、どんなことを考えたか。 ・ 見えてよかった。 ・ おじいちゃん汗かいてたいへんだな。 (4) 「おじいちゃん ありがとう」と言って手をつなぎながら見て回っているときはどんな気持ちだったか。 ・ いっしょに見てまわろうね。	・ けいすけのうれしい気持ちとおじいちゃんへの配慮の気持ちを出させる。 ・ けいすけの夢中になってしまった気持ちを出させる。 ・ 動作化（教師がおじいちゃん役で抱き上げたときに一言児童に言わせる。） ・ けいすけの気持ちに共感させる。
3 自分の生活を振り返って話し合う。 ○ 家族のために何かしたことはあるか。	・ 今までの体験を振り返り多くの児童が発言できるようにする。
4 教師の説話を聞く。 ・ 家族で助け合ったことややさしくしたことの体験の話をする。	

人力車（港区）

一 ねらい

自分でやろうと決めたことは、粘り強く最後までやり通そうとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

・東京都港区北青山三丁目にある善光寺の境内に「人力車発明記念碑」がある。和泉要助、鈴木徳次郎、高山幸助の三人が、人力車を発明し、国からおほめの言葉をいただいた記念として建てられたものである。郷土の先人の生き方に誇りをもつことができるようにしたい。

・日本人が発明したただ一つの乗りものである「人力車」を作った和泉要助らの話である。できあがるまでには、紆余曲折があり、やっとの思いで客を乗せることができる「人力車」が完成した。その過程を追いながら、ねらいとする価値の自覚を深めたい。

三 指導上の留意点と工夫

・学習活動 1 の導入では「人力車」と「人力車発明記念碑」の写真を示し、資料への興味・関心を高める。  
 ・和泉要助らが、粘り強く工夫に工夫を重ねながら「人力車」完成につとめたことや完成の喜びなどを中心にした発問構成にしたい。  
 ・学習活動 3 の自分自身を振り返る活動では、時間を十分取り、大切に扱う。じっくりと考えられるようワークシートに書かせることも有効である。

学習活動	指導上の留意点
1 人力車、発明記念碑の写真から知っていることを話し合う。 ○ この写真は何か。どんなことを知っているか。	・資料への興味、関心を高めさせる。人力車は日本人が発明した唯一の乗り物であることを伝える。
2 資料「人力車」を読んで話し合う。 (1) 人の力で引く車を作ろうと決めたとき三人はどんな気持ちだったか。 ・ いいものを作ってみせる。 ・ きっと便利なものができる。 (2) 作り始めてから色々な問題が出てきて、三人の心の中はどうだったか。 ・ こんなに問題が出てきて、もうだめだ。 ・ 一体どうしたらいいのだ。 ・ あきらめないで、がんばろう。 (3) 人力車がついに完成し、許可がおきて町じゅうの人気となったとき、三人はどんなことを思ったか。 ・ 完成してうれしい。 ・ ここまであきらめないでがんばってきてよかった。 ・ さらにもっといいものを作ろう。	・ 目標をもち、自分でやろうと決めたときの気持ちを考えさせる。 ・ 目標に対して様々な困難に出会ったときの心の中を考えさせる。話し合う中で、多様な感じ方や考え方に気付かせるようにする。 ・ やろうと決めたことを最後まであきらめないでやり遂げたときの喜びに共感できるようにする。
3 自分の生活を振り返って話し合う。 ○ 今まで、自分で決めたことを最後までやり遂げたことはあるか。また、最後までやり遂げることができなかったことはあるか。そのときの気持ちはどうだったか。	・ 自分の体験を想起し、自分のよさや不十分さに気付かせる。
4 教師の説話を聞く。	

花と緑のまち（調布市）

一 ねらい

自分たちの生活を支えている人々や高齢者を尊敬し、感謝しようとする態度を育てる。

二 資料選定の理由

・本資料は調布市の実話を基につくられたものである。町の緑が減っていくことを憂い、植樹活動をしている明治生まれの人々の話である。気持ちよく暮らせる町を後世の人々に残したいという一途で真剣な思いを感じとることができる資料である。町の身近な自然の中にも、それを育てて世話をしている人々がいることに気付かせ、尊敬と感謝の心が育つようにしていきたい。

・樹木など自然環境の整備だけでなく、町のために、献身的に尽くしてくださる方は各地域にいらっしゃる。この資料への感じ方の深まりが、自分たちの町へも広がっていくことが期待できる。

三 指導上の留意点と工夫

・日常、目にはしているが、見過ごしていたり気付かなかったりするものの中に、町を思う人の尊い気持ちが込められていることがある。石碑に関心をもつ二人の気持ちを大切に掘り上げたい。

・社会科や総合的な学習の時間での学習で地域に出かけていくことが多くなるのが中学年である。そこでの出会いやかかわりが本授業の展開後段で生かされるとよい。

四 展開例

学習活動	指導上の留意点
<p>1 身近な高齢者や町の人を思い起こす。</p> <p>○ いつもお世話になってありがたいなと感じたことはあるか。</p>	<p>・ねらいにむけて、児童の興味・関心を高める。</p>
<p>2 資料「花と緑のまち」を読んで話し合う。</p> <p>(1) まゆみとはるこは、学校の帰り道、桜の花を見てどんな気持ちだったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ なんてきれいな桜だ。</li> <li>・ だれが、こんなにたくさん植えたのだろう。</li> </ul> <p>(2) 桜の木の根もとに建てられた石碑を見て、どんなことを考えたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 石碑があるなんて、何か、わけがありそうだ。</li> <li>・ どんな意味なんだろう。</li> <li>・ 桜と関係があるのかな。</li> </ul> <p>(3) おばあちゃんの話聞いて二人は、どんなことを考えたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ あの桜がおばあちゃんたちのおかげで咲いているなんて今まで知らなかったな。</li> <li>・ 植えてくれてありがとう。</li> <li>・ 町のためにしてくれるなんて、明治生まれの人たちってすごい。町が好きなんだな。うれしいな。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 桜の木が身近なものであり、人々を楽しませてくれる存在であることをおさえる。</li> <li>・ 町のことを見過ごすことなく、関心をもって、知ろうとしている二人の気持ちに気付かせたい。</li> <li>・ 町のことを真剣に愛情をもって考えてくれる高齢者を、尊敬し感謝する二人の気持ちに共感させたい。</li> </ul>
<p>3 自分の生活を振り返って話し合う。</p> <p>○ 地域の高齢者や町の人々の苦労、努力で作られたものや残されているものはあるか。そこに込められた願いはどのようなものだろうか。</p>	<p>・発言が少ない場合には、教師が身近なものの中から紹介する。</p>
<p>4 教師の説話を聞く。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 町の人々の思いにふれ、感謝せずにはいられなかった体験を語り聞かせる。</li> </ul>	<p>・感謝する人々を身近に感じ、よりかかわっていきたいという意欲がもてる話をしたい。</p>



三河島のつる（荒川区）

一 ねらい

自然のすばらしさを知り、自然や動植物を大切にしようとする心情を養う。

二 資料選定の理由

・荒川区には、江戸時代に徳川家の狩り場（鷹狩り）があった。付近の人々は、將軍の鷹狩りのためにつるを餌付けしていた。このことは、荒川区史や安藤広重が描いた『名所江戸百景』（箕輪・金杉・三河島）などからも明らかである。東京の昔の様子を題材として創作された本資料を活用することで、児童は興味・関心をもって学習できるものと思われる。

・児童が、長べえの感じ方、考え方を想像できるようにしたい。そこで、長べえに託して自分の感じ方、考え方を語れるような発問を構成することが望まれる。

三 指導上の留意点と工夫

・児童が、つるのことを心から好きな長べえの素直な気持ち想像できるようにする。その上で、自然や動植物との望ましいかわり方について考えられるようにすることが大切である。また、自然や動植物に対して、つい自分中心の考え方に陥りがちな人間の弱さも考えられるようにする必要がある。

・体験を振り返る活動では、自然や動植物を大切にしたい体験、大切にできなかった体験や、そのときの心情や判断を想起する。また、友達との体験の交流を図る配慮も望まれる。

学習活動	指導上の留意点
<p>1 自然や動植物とのかかわりについて話し合う。 ○ 今までに自然の中にいる生き物を見たことがあるか。</p>	<p>・動物などの写真を提示する。</p>
<p>2 資料「三河島のつる」を読んで話し合う。 (1) 真っ白な羽を血で赤く染めた子づるを見た長べえは、どんな気持ちだったか。 ・ かわいそうに、一体どうしたというのだろう。 ・ 大好きなつるが痛い思いをしてつらい。 (2) しいだいになつてきた子づるを見た長べえは、どんな気持ちだったか。 ・ なんかかわいいんだろう。 ・ つるが自分になつてくれてうれしい。 (3) 楽しそうにえさをついばんでいるつるの親子を見ながら長べえは、どんなことを考えたか。 ・ つるはやっぱり自然の中で過ごした方がいい。 ・ 子づるも親づると一緒にいた方がいいかもしれない。 ・ せっかくなついたらつるを放すのはつらい。 (4) つるの姿が見えなくなるまで手を振り続ける長べえは、どんな気持ちだったか。 ・ ずうっと元気で、またこの村に帰ってきてほしい。</p>	<p>・傷付いた動物に出会った経験を基に長べえの気持ちを想像できるようにする。 ・動物などの愛くるしさ、自分になつかれた経験を基に、長べえの気持ちを想像できるようにする。 ・動植物に対する思いやりにかかわる多様な感じ方、考え方に会えるようにする。</p>
<p>3 今までの生活を振り返って話し合う。 ○ 今までに動植物を大切にしたこと、大切にできなかったことはあるか。</p>	<p>・動植物とかかわった体験を想起させるようにする。</p>
<p>4 教師の説話を聞く。 ・自然の素晴らしさを感じた体験談を語り聞かせる。</p>	

わらじじぞう（世田谷区）

一 ねらい

生命あるものに深い愛情をもち、その生命を大切にしようとする心情を養う。

二 資料選定の理由

- ・ 世田谷区新町に今も実在するお地蔵様である。昔このお地蔵様には数多くのわらじが供えられており、道行く農民や旅人がわらじが切れると借用し、また返納する習慣があった。牛は、爪をはぐと歩けなくなる。牛わらじは、大切な履き物であった。
- ・ しかし、その製作には大変な労力と時間がかかったという。当時の農民の生活に欠かせぬ牛。単に荷を引くものとしてではなく、そこに生活や苦楽を共にする牛への愛情が感じられる。物言わぬ牛の身になって精一杯助けようとする親子の姿から生命尊重の精神を感じ取れる資料である。

三 指導上の留意点と工夫

- ・ 「こえおけ」・「下肥」・「牛わらじ」等、導入で当時の農民の生活について知らせ、資料の内容が理解できるようにしておく必要がある。
- ・ 展開後段では、動物にとどまらず、人の生命にまで広げていくようにする。身近な生命（家族や自分・周りの人々）に愛情をもってその生命を尊んでいるかいるかどうかを振り返らせたい。

学習活動	指導上の留意点
<p>1 昔、東京の農民がどんな生活をしてきたかを知る。</p> <p>○ 下肥を桶に入れ集め、畑にまいていたのを知っているか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 運搬のために牛や馬が欠かせなかったことや、牛はひづめが割れると歩けなくなり、ばい菌から生命に危険が及ぶことがあることをおさえる。</li> </ul>
<p>2 資料「わらじじぞう」を読んで話し合う。</p> <p>(1) 与助とキチはどんな気持ちで車を押すために後ろに回ったのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ デコが苦しそうだ。</li> <li>・ 涙を流しているぞ。重くて辛いのだな。かわいそうに。</li> <li>・ 少しでもデコを楽にしてやろう。</li> </ul> <p>(2) 「デコのわらじをさがしてくる」と走り出したときキチはどんな気持ちだったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ このままだとデコが大変なことになる。</li> <li>・ 一刻も早くデコを助けないとだめだ。</li> <li>・ デコ、待っててね、助けてあげるから。</li> </ul> <p>(3) お地蔵様に手を合わせたキチは、どんな思いを伝えていたのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ デコは大切でかわいい牛です。デコを助けてください。</li> <li>・ もう力が出ません。デコの生命を救うために力を貸してください。</li> <li>・ このままではデコが死んでしまいます。助けたいのです。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ デコの様子から、ただならぬものを感じ、デコを思いやる気持ちを想像できるようにする。</li> <li>・ デコのために無我夢中で走り出すキチの思いを考えられるようにする。</li> <li>・ デコが心配でならないのに力が尽き、お地蔵様にすがる真剣な思いについて話し合わせたい。「助けて」だけにならないように思いを語らせるようにする。</li> </ul>
<p>3 自分の生活を振り返り、生命を大切に感じた経験を話し合う。</p> <p>○ 家族や自分、周りの人々の生命を大切だと感じたことはあるか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 板書から、生命尊重にかかわる子どもの反応を取り上げ「このように、動物に限らず、人間でも生命を大切と感じた経験はあるか」となげかける。</li> </ul>
<p>4 教師の説話を聞く。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生命の尊さを感じた教師の経験を語り聞かせる。</li> </ul>	

ぼくたちの多摩川（調布市）

一 ねらい

郷土の文化や生活に親しみ、郷土を大切にしようとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

・三・四年生の段階においては、地域での活動がとても活発になる。この時期に、地域の自然や文化、伝統に興味をもち、大切にしていこうとする心情を養っていききたい。

・本資料では、多摩川で出会ったおじいさんの行動や話が印象的に描かれている。郷土の自然を守るために、自ら積極的ににかかわっていく大切さを教えてくれる資料である。

三 指導上の留意点と工夫

・導入では、社会科や総合的な学習の時間で学習した地域の自然や文化、伝統、またそれを守ってきた活動等を想起させ、興味や関心を高めるようにする。

・主人公の郷土の自然に対する心の変化を共感的に考えさせたい。

・展開後段では、自分たちの地域の自然や文化、伝統を想起させるとともに、それらに対して自分はどうにかかわってきたのか、またどんな思いをもっているのかを振り返らせたい。

学習活動	指導上の留意点
<p>1 社会科や総合的な学習の時間で学習した内容を示し、地域のことを想起させる。</p>	<p>・学習内容を整理して示すことによって、地域に目を向けさせる。</p>
<p>2 資料「ぼくたちの多摩川」を読んで話し合う。</p> <p>(1) 主人公は、多摩川のことを調べていくうちにどんな考えをもったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地域の人に親しまれていて、すばらしいな。</li> <li>・ みんな、多摩川のことを好きなんだな。</li> </ul> <p>(2) お父さんの話を聞いたとき、主人公はどんな気持ちだったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ そんなことをするなんて許せない。</li> <li>・ 自分の目で確かめたい。</li> </ul> <p>(3) おじいさんがごみ拾いをしているのを見たとき、主人公はどんな気持ちをもったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ お父さんの話は本当だった。</li> <li>・ ぼくも手伝って多摩川をきれいにするぞ。</li> </ul> <p>(4) 市民清掃の話を聞いたとき、主人公はどんなことを考えていたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ たくさんの人が多摩川を大切にしてくれてうれしい。</li> <li>・ ぼくも積極的に行動するぞ。</li> </ul>	<p>・社会科や総合的な学習の時間での地域学習の経験を基に、主人公の気持ちを想像させたい。</p> <p>・ごみ拾いの意味をおさえることで、主人公の心情をより深く考えさせたい。</p> <p>・主人公の郷土を大切にしようとする意欲の高まりをおさえる。</p>
<p>3 自分の生活を振り返って話し合う。</p> <p>○ 自分たちの地域の中で、大切にしてきた自然や文化、伝統にはどんなものがあるか。また、自分はどのようににかかわってきたか。どんな思いをもっているのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学校の近くに〇〇公園がある。清掃活動に参加した。</li> <li>・ 9月にお祭りが行われる。これからも続けてほしい。</li> </ul>	<p>・地域の自然や文化、伝統に対する自分自身の思いやかかわりを振り返らせたい。</p>
<p>4 教師の説話を聞く。</p>	

岩淵水門（北区）

一 ねらい

より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力しようとする態度を育てる。

二 資料選定の理由

・ 荒川流域の人々を水害から守る岩淵水門を完成させた青山士が主人公である。パナマ運河工事に参加した後、その技術をもって岩淵水門・荒川放水路の着工に従事した主人公の心の底には、功名や出世などの私欲ではなく、ただ人々の生命と暮らしを守りたいとの意志のみが流れており、青山士の心を深く考えさせることにより、ねらいを達成できる資料である。

三 指導上の留意点と工夫

・ 岩淵水門や荒川放水路ができる前にいかに洪水が多く、人々が苦しんでいたかを認識させてから展開に入りたい。  
 ・ 本資料の中心場面は作業員と同じ立場になって仕事を進める主人公の様子と記念碑の無記名の場面であるが、仕事を進める場面では作業の様子を示す一枚絵を用いたり、地下たび、きゃはんなど実物を示すのも効果的である。また、記念碑の場面では記念碑に記されている語句をカード化するなどしてその言葉に託されている青山士の心をしっかり考えさせるように指導の工夫をしたい。

四 展開例

学習活動	指導上の留意点
1 岩淵水門や荒川放水路ができる前にいかに洪水が多く、人々が苦しんでいた様子を話し、資料についての導入をする。	・ 洪水にかかわる被害の状況を示す図表などを提示する。
2 資料「岩淵水門」を読んで話し合う。 (1) なぜ、青山さんはアメリカに渡り、パナマ運河を開く工事に参加したのか。 ・ 人の役に立ちたいと思ったから。 ・ 学生時代からの夢であったから。 (2) 青山さんは作業員と同じ立場になって仕事を進めていたが、どんな気持ちだったか。 ・ 全員が力を合わせてこそ、本当の仕事ができる。 ・ 他の者の手本となって作業を進めることが大切。 (3) 記念碑には青山士の名はどこにも書かれていないが、青山さんのどんな気持ちからだったのか。 ・ ひとりの力で工事ができたのではない。全員の力の結晶なのだ。 ・ 人々の役に立つことだけでわたしは満足だ。	・ パナマ運河について説明を加えておく。 ・ 資料に書かれていること以外のことでもよい。 ・ 一枚絵を示し、話し合いを焦点化する工夫をする。 ・ 地下たび・きゃはんについては実物を示し、説明するとよい。 ・ 記念碑に記されている言葉をカード化して、青山士の心を深く考えさせたい。
3 自分の生活を振り返って話し合う。 ○ 今までに目標に向かって努力したことはあるか。	・ 日ごろのめあてを考えさせ、それに向かう自分自身を振り返らせる。
4 教師の説話でまとめる。	・ 余韻をもって終わる。

心の通い合い（大島町・品川区）

一 ねらい

だれに対しても思いやりの心を持ち、相手の立場にたって親切にしようとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

・本資料は、一九八六年（昭和六十一年）、東京都の伊豆大島で三原山が大噴火し、全島民が島を離れ、約一カ月、都内の各地で避難生活を送った資料である。この話は、そのとき、仮の避難所となった品川区の小学校における人々とのふれあいの様子であり、そこで活躍したPTA役員の林田さんを中心に書かれているものである。親切にする人と親切にされている人の心がかみ合いかみ合っていることが、心の通い合う親切になることなど、「親切」とはどのようなことなのかを考えさせる上では効果的な資料である。

三 指導上の留意点と工夫

・東京都の伊豆大島で三原山が大噴火し、都内の各地で避難生活を送っていたことを知っている子どもは少ないと思われるので、事前の指導や導入などで理解を深めておく必要がある。様子を把握しておくことで、島を離れ、戸惑い、困っている大島の人の気持ち、大島の人の気持ちを考えて親切にしている林田さんの気持ちをより深くとらえることができる。  
 ・心の通い合いのすばらしさを感じた林田さんの気持ちをとらえながら、親切にすることの難しさや親切にしたときの満足感・充実感などに共感させたい。

四 展開例

学習活動	指導上の留意点
1 伊豆大島の三原山噴火と避難生活の様子について知る。 ○ 三原山が噴火し、避難生活を送った人たちはどんな様子だったか。	・三原山が噴火した様子などの写真を提示し、どのような避難生活だったのかをとらえさせる。
2 資料「心の通い合い」を読んで話し合う。 (1) 林田さんは、どんなことを考えながら大島の人たちに世話をしていたか。 ・ 大変だけれど、困っている人のために助けてあげなければならぬ。 ・ みんなのために役に立てたらいい。 (2) 心の通い合いのすばらしさを感じた林田さんの心の中は、どんなだったか。 ・ お互いの気持ちが通じ合わなければ親切ではないんだ。 ・ 大島の人たちと心が通じ合ってとてもうれしい。 ・ 相手の気持ちを考えて親切にすることは難しかったけど、とても気持ちがいい。 (3) 涙を流している林田さんは、どんな気持ちだったか。 ・ お世話をすることで本当に親切について分かったような気がする。 ・ 大島でもがんばってほしい。	・困っている大島の人々になんとか助けてあげたいと思っている林田さんの気持ちに共感させる。 ・大島の人たちと心がかみ合ったときの林田さんの親切に対する多様な感じ方や考え方に気付かせる。 ・親切にしたあとの林田さんの気持ちに共感させる。
3 自分の生活を振り返って話し合う。 ○ 今までに相手のことを考えて、親切にしたことがあるか。そのときどんな気持ちだったか。	・親切にはいろいろな行為があることに気付かせ、親切にした経験を振り返らせる。
4 教師の話を聞く。 ・ 親切にしている人について話す。	

大賀博士を支えた人々（府中市）

一 ねらい

日々の生活が、人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる心情を育てる。

二 資料選定の理由

・本資料は、府中に住む人たちがハス博士の大賀博士の研究費などを援助したことをもとにした話である。戦災で家を焼かれた博士に、家を提供し府中に住ませたのは「大賀会」の人々であり、研究を続けられるように支援したのは「蓮の実会」の人たちであった。博士は、これらの人々の温かい気持ちや支援を受け、それに応えるように感謝の心をもって生涯自分の研究に打ち込むことができたのである。支援した人々とそれに応える博士の姿を通して善意に対しては、素直にありがたいという気持ちを抱き、心から感謝する心情を育てたい。

三 指導上の工夫

- ・写真等の視聴覚教材を使い資料の理解を助ける。
- ・ワークシートを活用し、じっくり考え発表し合えるようにする。
- ・心のノートを活用する。

学習活動	指導上の留意点
<p>1 ハスの花の写真を見せて名前を知っているかを聞く。 ハスの花が種を作るまでの流れを説明する。</p>	<p>・知っている児童が少ないのであまり知識にこだわらない。</p>
<p>2 資料「大賀博士を支えた人々」を読んで話し合う。 (1) 博士は貧しい生活をしながらも、どうしてハスの花の研究に打ち込んだのか。  <ul style="list-style-type: none"> <li>・ハスの花にとっても魅力を感じていた。</li> <li>・ハスの花を咲かせて人々を喜ばせたかった。</li> <li>・自分始めた研究をやり遂げたかった。</li> </ul> (2) 長島さんをはじめとして博士の研究支援をした人たちはどんな気持ちからか。  <ul style="list-style-type: none"> <li>・博士の研究がすばらしいと感じて応援したくなった。</li> <li>・支援者たちの熱意に心をひかれた。</li> <li>・博士の生活の苦しさが伝わってきて何とかしてあげたい。</li> </ul> (3) 「蓮の実会」の支援を受けた博士はどんな気持ちで研究を続けていたか。  <ul style="list-style-type: none"> <li>・絶対に研究を成功させてみんなを喜ばせよう。</li> <li>・皆さんのおかげで研究が続けられるので嬉しい。</li> <li>・「ありがとう」皆さんに感謝したい。</li> </ul> </p>	<p>・ハスの花の魅力が伝わるような助言を行う。</p> <p>・博士の研究を支援したいと考えたさまざまな立場の人々の思いを出し合えるようにする。</p> <p>・支援を受けた博士の気持ちを深く考え、その思いを出し合えるようにする。ワークシートに書く。</p>
<p>3 自分の生活を振り返り、自分たちの生活を支えてくれている人や見守ってくれる人について話し合う。 ○ 交通安全のために、交差点に黄色い旗を持って立つてくれる保護者の方や地域の方たちのおかげで安全に学校を登下校できる。</p>	<p>・多くの児童の発表を通して、人は支え合って生きているので、感謝の気持ちが大切であることに気付かせる。</p>
<p>4 教師の説話を聞く。  <ul style="list-style-type: none"> <li>・日ごろの暮らしの中でも、他の人に感謝する気持ちを語る。</li> </ul> </p>	<p>・心のノートも活用する。</p>

天然痘とたたかう（武蔵村山市）

一 ねらい

生命がかけがいのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。

二 資料選定の理由

・本資料は、武蔵村山市作成による郷土資料の一つであり、主人公指田鴻齋は、江戸時代末期に天然痘の治療に取り組んだ実在の医者である。鴻齋の懸命な努力と志は長い年月を超えて受け継がれ、武蔵村山市における天然痘患者は激減した。現在、その功績を知る人は少ないが、それゆえにひたむきに人々の命を救った医者生き方を通して、かけがえない生命を尊重する心を育てていくことが望まれる。本資料は、文京区小石川に伝わる民話を基に創作されたものである。

三 指導上の留意点と工夫

・江戸時代末期における天然痘治療は、祈祷などによる民間療法と呼ばれる非科学的な治療が主流であった。導入に当たっては、鴻齋の生きた時代に医師となり、天然痘治療に取り組むことが、どれだけ大変なことであるかを児童に伝えるため、時代背景・社会状況・天然痘についてわかりやすく説明することが必要である。鴻齋の思いや願いを通して、生命がかけがいのないものであることを知り、自他の生命を尊重する心を育てたい。

学習活動	指導上の留意点
<p>1 指田鴻齋の写真を見せて、いつごろの時代の人であるか推測させる。</p> <p>○ 指田鴻齋が武蔵村山市の医師であることを伝え、資料の時代背景・社会状況・天然痘について説明する。</p>	<p>・伝記は、資料の内容が児童の現実の生活と結びつきが少ないことから、資料について説明を行うことで、内容の理解を容易にすることが望まれる。</p>
<p>2 資料「天然痘とたたかう」を読んで話し合う。</p> <p>(1) この話を読んで、一番心を打たれたところはどこか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分のことより先に、人々の生命を救うことを考え、天然痘とたたかったこと。</li> <li>・困難を乗り越え、人々の生命を救ったこと。</li> <li>・生命を救うため、お金のない人々に無料で天然痘の予防接種を行ったこと。</li> </ul> <p>(2) 幼い鴻齋は、天然痘の治療に苦しむ父の姿や兄妹の死を見てどのような気持ちになったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・どうして助けることができないのだろう。</li> <li>・大切な家族の生命を救うことができなくてつらい。</li> <li>・助けることができない父の悲しみがよくわかりつらい。</li> <li>・何とかして生命を救いたい。</li> </ul> <p>(3) 鴻齋はどのような気持ちで医者への修行に出たのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・祈るだけでは生命を救えない。自分が医者になろう。</li> <li>・自分が医者となり、天然痘の治療を行いたい。</li> <li>・医師の技術や知識を身に付け、天然痘で死んでいく人々の生命を救いたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一番心を打たれたところを考えることにより、鴻齋の生命を尊重する心に気付かせる。</li> <li>・人々のため、懸命に天然痘治療に取り組んでいた鴻齋の父は、大切な家族をも天然痘で失う。それを身近で見ていた鴻齋の気持ちを考えさせる。</li> <li>・当時、医者になることは今よりも大変難しく、それでも医者への修行に出た鴻齋の思いや願いを考えさせる。</li> </ul>
<p>3 これまでの自分の生活を振り返って、生命を大切に感じた経験を話し合う。</p>	
<p>4 生命の大切さについて教師の説話を聞く。</p>	<p>・「心のノート」を活用して考えさせることもできる。</p>

マネージャー（中野区）

一 ねらい

身近な集団の中で、自分の役割を自覚し、責任を果たそうとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

・五・六年生は高学年として学校の中で責任ある役割を担うようになる。また、学校だけではなく地域の中でも様々な集団に属し、活動している子が多い。活動範囲が広がり、様々な役割をもつ五・六年生であるが、その役割は必ずしも自分の願いになつたものばかりではない。しかし、集団全体の向上のために、そして自分自身の成長のためにも自分の役割をしっかりと果たすことの大切さを理解させたい。

・本資料では、マネージャーの役割を任された主人公がその役割を前向きにとらえ、責任を果たそうとする姿が描かれている。この主人公と自分を重ねること、ねらいとする道徳的価値の視点で自分自身をしっかりと振り返らせたい。

三 指導上の留意点と工夫

・野球部員だった須崎君がマネージャーの役を依頼されたときの心の葛藤、マネージャーの仕事に取り組みを持ち、チームメイトから胴上げされる姿から、自分の役割を果たすことの喜びや充実感に気付かせたい。また、児童は所属している集団の中で、自分なりに役割を果たしている。そのことを改めて思い起こさせ、さらに責任を果たそうとする気持ちを育てたい。

四 展開例

学習活動	指導上の留意点
<p>1 身近な集団の中でどんな役割を担っているか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 放送委員会で朝の放送を担当している。</li> <li>・ 交通少年団に入っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分の役割に目を向けさせる。</li> </ul>
<p>2 資料を読み、須崎君の気持ちについて話し合う。</p> <p>(1) 監督に「マネージャーになってくれないか。」と言われたとき、須崎君はどんな気持ちだったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ どうしてぼくがマネージャーをやらなきゃいけないんだ。ぼくには夢があったのに。</li> <li>・ もう野球をやめよう。</li> <li>・ なんとか選手としてがんばっていきたい。</li> </ul> <p>(2) 須崎君はどんな気持ちでマネージャーの仕事をがんばってきたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ チームのためにマネージャーをがんばる。</li> <li>・ みんなで一緒に甲子園に行きたい。</li> <li>・ 自分の役割を果たす。</li> <li>・ くやしきはあるが、野球はやめない。</li> <li>・ ぼくも野球がやりたい。</li> </ul> <p>(3) 須崎君は、胴上げされながらどんなことを考えていたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 責任を果たせてうれしい。</li> <li>・ 野球をやめないでよかった。</li> <li>・ みんなの役に立てたんだ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ マネージャーの仕事やチームの中での立場を理解させる。</li> <li>・ 須崎君の決意、仕事に対する責任感、野球への未練等、多様な意見を出させたい。</li> <li>・ 自分の役割を全うした満足感、達成感に共感させる。</li> </ul>
<p>3 自分の生活を振り返って話し合う。</p> <p>○ いつも参加している集団で進んで役割を果たしたことはあるか。また、役割を果たしたとき、どんな気持ちになったか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 意図的指名を行い、多様な生活体験を出させる。</li> <li>・ 「心のノート」を活用する。</li> </ul>
<p>4 教師の説話を聞く。</p>	



苦い映画の思い出（葛飾区）

一 ねらい

自分の行為が及ぼす結果について深く考え、その行為の結果に責任をもつ態度を育てる。

二 資料選定の理由

・人間は家庭、地域社会の中で互いに協力し、支え合って生活している。中学生になると自己内省が深まるとともに、周囲の人々に対する関心も高まってくる。しかし、本資料にもあるように、地域社会の行事への積極的な参加がややもすると軽視されがちで関心が希薄になるといえる。そこで、地域社会の行事を見つめ直し、それに参加していく意義に触れながら地域社会、郷土に根づく生き方について考えることができる資料といえる。

三 指導上の留意点と工夫

- ・本資料の主人公正雄はごく普通の中学一年生であり、生徒は正雄の気持ちを考えやすいと思われる。正雄の心の動きを、自分の体験と重ね合わせて共感的に考えさせたい。
- ・本資料にはだれもが体験するであろう葛藤場面が多く含まれるが、正雄の心の迷いや悩みに共感させ、誠実に行動することの大切さに気付かせることにより、ねらいにせまりたい。
- ・本資料での重要な場面では、一枚絵等を作り考えを深めやすくする工夫をする。

学習活動	指導上の留意点
1 地域社会の行事（防災訓練など）のことについてふれ、資料への導入とする。	・資料に興味をもたせる。
2 資料「苦い映画の思い出」を読み、正雄の気持ちを中心に考える。 (1) 両親に防災訓練に参加することを断ったが、正雄はどんな気持ちだったか。 ・ 防災訓練なんかめんどくさい。 ・ 自分の時間がほしい。 ・ 友人と楽しく過ごすほうがいい。 (2) 佐藤さん夫婦とばったり会い、車いすを押したおばあちゃんから話しかけられたとき、正雄はどんな気持ちだったか。 ・ まずい、なんと言って断ろう。 ・ 申し訳ないけどしかたがない。 (3) 正雄はどんな気持ちで映画館で流れる映像を見つめていたのか。 ・ やはり、防災訓練に参加すればよかった。 ・ 両親、佐藤さん夫婦に悪いことをした。 ・ 両親、佐藤さん夫婦に合わせる顔がない。 3 誠実に行動することの大切さを生徒一人一人が自覚する。 ○ 誠実に行動するために、大切なことはどのようなことか。	・資料は教師が範読する。 ・自分の体験と重ね合わせて考えさせ、自分の問題として受け止めさせる。 ・正雄の葛藤する気持ちを深く考えさせる。 ・正雄の後悔している気持ちに気付かせる。 ・自分の体験と重ね合わせて考えさせ、誠実に行動することの大切さに気付かせる。
4 教師の説話でまとめる。	・一方的に教え込まず、生徒の自覚を促すようにする。

車人形（八王子市）

一 ねらい

礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとれるような態度を育てる。

二 資料選定の理由

・八王子市恩方で職芸能として江戸時代後期以降継承されてきた車人形は、現在東京都の無形文化財として継承されている。中学生が、歴史のある西川座の西川氏や、車人形の研究にスウェーデンから来ているカトリーヌさんとかかわりを通して、自分の気持ちを伝えるにはどのように表現したらよいかを考えさせるとともに、礼儀の意義や大切さについて考えさせる資料である。

三 指導上の留意点と工夫

・資料に描かれている伝統芸能とそこに込められていた先人たちの願いや、それを通して表現しようとしている心についても関心をもたせたい。  
 ・文化・伝統を題材にした本資料を通して、内容項目4-1(8)で活用を図り、郷土を愛し大切にすることを心や態度を育てることもできる。  
 ・本資料は、職場訪問における言葉遣い、態度や動作について関連付けてその在り方を考えさせたい。

学習活動	指導上の留意点
1  初めて会った人の印象は、どのようなところで決まると思うか。 ・ 身だしなみ、あいさつの仕方や言葉遣いが大切である。	・ 日常的なできごとなどに目を向けさせ、本時の学習への導入を図る。
2  資料「車人形」を読んで話し合う。 (1) 作業場にいた人たちに対して、うまくきっかけを作れずにいた可也子の心の中はどうか。 ・ 緊張しているからどうしていいわからない。 ・ いつもの学校生活とは勝手が違うため戸惑っている。 (2) スウェーデン人のカトリーヌさんにお茶をすすめられ、あいさつをしたあと、可也子と陽子が背筋を伸ばして座り直したのはどうしてだろうか。 ・ 外国人がかしこまって座って直っすぐ自分たちを見ているので、こちらも自然と背筋が直っすぐになった。 ・ 相手の真っすぐな気持ちが伝わってきて、自分たちもその気持ちに応えようと思ったから。 (3) 最後のあいさつで西川さんが、可也子の顔を見てあいさつをしてくれたのはどうしてだろうか。 ・ 可也子がまじめな顔であいさつをしたので、その気持ちに応えようとしてくれたから。 ・ 可也子の感謝の気持ちが伝わったから。 3  礼儀の意義や、時と場に応じた適切な言動をとることの大切さについて話し合う。 ○ あなたは、職場訪問のときのどんな気持ちがしていたか。また、日ごろのあいさつや礼儀作法では、どのようなことが大切か。 ・ ていねいな言葉で、要点を明確に伝える。 ・ きちんとした態度で相手の目を見て話す。	・ 状況が変わっていく中で、きちんとしたあいさつができていくかも注目させたい。 ・ カトリーヌさんのあいさつに対して思わず座り直した可也子たちの姿から、相手の気持ちがこちらに伝わってくることに気付かせる。 ・ 心のこもったあいさつをするにはどうすればよいかに視点をおきたい。 ・ 具体的な体験を通して、自らの言動について振り返らせるとともに、形式ではなく、心をこめることの大切さを自覚させる。
4  教師の説話を聞く。 ・ 心のこもったあいさつの大切さを語り聞かせる。	・ 実例を挙げての生活指導にならないように配慮する。

焼けた空（江東区）

一 ねらい

生命はかけがえのない大切なものであることを理解し、すべての人の生命を尊重する心情を養う。

二 資料選定の理由

・本資料は、東京大空襲での実話を基にした資料である。昭和二十年三月十日B29により東京の下町、江東区・墨田区・台東区は死者十万人、負傷者十一万人に及ぶ壊滅的な状況となった。戦後六十年を過ぎ、中学生にとって戦争の悲惨な出来事は、遠い昔のこととして身近な地域で起こったことであるという実感が少ない。

・本資料を通して、自分たちの住む東京で起こった悲劇を知り、戦争の渦中で懸命に生きようとした人々のかけがえのない生命を尊ぶ心情を養っていくことが望まれる。

三 指導上の留意点と工夫

・資料の構成は、恵子という主人公が江東区の戦争の記録を調べることで、命を尊重する心情を養っていく経過が綴られている。そこで、学習活動として恵子の心情の変化を通して、生徒自身が命の大切さを理解し、尊重していく展開とした。

・本資料は「生命尊重」に限らず内容項目4―(10)「人類愛」においても活用できる。

学習活動	指導上の留意点
<p>1 戦争のとき、この町がどのような被害を受けたかを尋ね、考えさせる。</p>	<p>・戦争が遠い昔のことではなく、自分たちの町にも被害を与えたことを気付かせる。</p>
<p>2 資料「焼けた空」を読んで話し合う。</p> <p>(1) 母子像の真実を知ることが怖いような気持ちでいた恵子の心の中はどんなか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今まで知らなかった恐ろしい事実があるように思えた。</li> <li>・ 戦争の悲惨な話を知るのが怖い。</li> <li>・ 戦争の悲惨な出来事を知っても、何をすることもできないので知りたくなかった。</li> </ul> <p>(2) 「生きた証を受け取った私たちは何をすればいいんだろう……。」と言って黙り込んだ恵子は、どのような気持ちだったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分にいったい何ができるのだろうか。</li> <li>・ 生きた証を受け取ることは、とても難しい。</li> <li>・ どうしたらよいかわからないが、何とか自分にできることを探したい。</li> </ul> <p>(3) 今ようやく本当の母子像に出会ったと思う恵子の気持ちとはどのような気持ちだったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 母と子の精一杯生きた証であることがわかった。</li> <li>・ 尊い命を奪った悲劇を二度と繰り返さない。</li> <li>・ わたしたち生きている人間に命の大切さを教えてくれた。</li> <li>・ 戦争の悲惨な出来事を通して、命の大切さを受け継いでいくことに気付いた。</li> </ul> <p>3 生命の大切さ、尊さについて、生徒一人一人が自覚する。</p> <p>○ あなたが生命の大切さ、尊さを実感するのはどんなときか。</p>	<p>・ 恐怖に怯え悲しげな様子の母子像を見た恵子の気持ちを考えさせる。</p> <p>・ 「恐ろしい戦争の体験を書くことで、自分が生きてきた証を残したかったのではないか。」という兄に対して、「自分たちは何をすればいいんだろう。」と思悩む恵子の気持ちについて考えさせる。</p> <p>・ これまでの恵子の気持ちの変化を考えることによって、「本当の母子像に出会った。」と実感する恵子の思いや願いについて気付かせる。</p> <p>・ 生命のかけがえのなさ、尊さについて気付かせる。</p>
<p>4 「生命尊重」にかかわる「心のノート」を活用し、生命の大切さについて考えさせる。</p>	

甘い小松菜（江戸川区）

- 一 ねらい  
 社会のルールを守り、自他の権利を尊重する態度を育てる。

二 資料選定の理由

- ・小松菜は江戸川区の特産品である。江戸時代、徳川吉宗が鷹狩りで小松川の神社に立ち寄ったときに、村人が献上したことから小松菜と名付けられた。主人公が、職業体験を通して地元の特産品に目を向ける様子を題材とする本資料を活用することで、生徒は興味・関心をもって学習できるものと思われる。
- ・生徒が、主人公の感じ方・考え方を想像できるようにしたい。そこで、主人公に託して自分の感じ方・考え方を語れるような発問を構成することが望まれる。

三 指導上の留意点と工夫

- ・生徒が、職業体験を通してルールを守ることの大切さを自覚していく主人公の心の変容を考えさせる。その際に、人間は集団の中で支え合って生きていること、思いをはせるようにさせたい。その上で、社会のルールを守り、自他の権利を尊重していくことについて考えられるようにすることが大切である。
- ・学級や学校生活でルールを守ることの大切さを感じた体験、地域や家庭でルールを守れなかった体験や、そのときの心情や判断を想起させるなど工夫を図る。また、友達との体験の交流を図る配慮も望まれる。

学習活動	指導上の留意点
1 学級や学校でルールがなぜ必要なのかについて話し合う。 ○ 「これは必要だ」と思うルールは何か。その理由は何か。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の日常的なできごとに目を向けさせ、本時への導入を図る。</li> </ul>
2 資料「甘い小松菜」を読んで話し合う。 (1) 母が言う「我が家のルール」について、由美はどんな気持ちだったか。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 口うるさいなあ。守ればいいんですよ。</li> <li>・ 健康のためにも守るべきだとは分かっている。</li> </ul> (2) 春江に「班のルール」を指摘されたとき、由美はどんな気持ちだったか。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ルール、ルールって何よ。嫌なものは嫌なの。</li> <li>・ 守らなくちゃならないとは分かっているけど……。</li> </ul> (3) 由美が、小松菜の世話を嫌がっていたことを隠そうとしたのはなぜか。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ せっかく職業体験するのだから前向きにやりたい。</li> <li>・ 班員が仲良くルールを守って体験したい。</li> </ul> (4) 「島田さんの言葉にはっとした。」とあるが、由美は、どんなことを考えたか。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 何事もみんなで決めたルールが基本になると学んだ。</li> <li>・ 集団の中ではルールが必要だと分かった。</li> <li>・ 社会生活はルールを守らなければ維持できない。</li> </ul> 3 ルールを守ることの大切さについて、生徒一人一人が自覚する。 ○ ルールを守るために大切なことは何か。 ○ 一人一人がどういうことに気を付けるべきだろうか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「我が家のルール」が何のためにあるのかを考えさせるようにする。</li> <li>・自分で決めたルールも守れない由美を責めるのではなく共感させた上で、ルールを守る意義について考えさせる。</li> <li>・由美の心の変容に着目させながら、ねらいとする価値に迫っていくように支援したい。</li> <li>・社会の一員として決まりやルールを守ることの必要性について、とらえさせる。</li> </ul>
4 教師の説話を聞く。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ルールを守る大切さを実感した体験談を語り聞かせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・集団の一員としてルールを守ることの大切さについて深く考えさせたい。</li> <li>・教師が語り聞かせる。</li> </ul>

御蔵島の心（御蔵島村）

一 ねらい

人々の判断や行動により郷土に貢献できることを理解し、郷土に尽くそうとする姿勢を養う。

二 資料選定の理由

・本資料は一八六三年に起きたアメリカ船バイキング号の遭難事件を扱ったものである。日本が鎖国をしているなか、外国人との接触により島民が危害を受けるかもしれないことに動揺しながらも、一郎は漂着船の乗務員を救助した。それは、生命尊重という点でも、島を救うという点でも不可避なことだと考えたからである。島民も一郎の熱意にひかれ、救援活動を行った。一郎の心情を通して、郷土を愛するとはどういうことかを考えさせることができる資料である。

三 指導上の留意点と工夫

・大きな不安のなか、一郎が島を救おうという決断をしたところに着目し、郷土愛について考えさせる。  
 ・導入では、伊豆諸島について触れ、その伝統や島の特色について扱うとよい。  
 ・終末では、日常生活の中で、郷土だけではなく、地域のために尽くしている人々について考えを深めるとよい。  
 ・一人一人が周囲の人たちと協力し、小さなことであっても郷土のために尽くすことが重要であること。そして、このことが郷土への貢献につながることに気付かせたい。

学習活動	指導上の留意点
1 伊豆諸島の伝統や特色について考え、発表する。 ・豊かな自然に恵まれた、東京都の島々である。	・御蔵島について触れておく。 ・写真等の資料があるとよい。
2 資料「御蔵島の心」を読み、一郎の気持ちを中心に考える。 (1) 一郎が「遭難者を助けよう。」と言ったとき、島民はどのような気持ちだったか。 ・外国人に何をされるか不安なので、助けたくない。 ・自分たちの食糧でさえ不十分なのに、人にあげる分までない。 (2) 一郎はどんな考えで村の人たちに救助することを説得したのだろうか。 ・黒船を救うことは島を救うことになるから。 ・同じ海に生きる者を見殺しにはできないと思ったから。 (3) 一郎にとって「島を守る」とは、どのようなことか。 ・島の将来や島民のことを考え、行動すること。 ・自分よりも島や島民を大切にする。	・一郎の心情を追っていくようにする。 ・島民たちが心配していることについて考えさせる。 ・島を守るという一郎の強い意志に気付かせたい。 ・「黒船を救うことは、島を救うことになる」という言葉を通して考えさせる。
3 郷土のことを考え、郷土のために生きることの尊さを考える。 ○ 地域や郷土のために尽くしている人が、あなたの周りにもいることを知っているか。 ○ 中学生のあなた自身にとって、地域や郷土のために生きるとはどのようなことか。	・自分たちが生活している地域のことを振り返らせ、郷土を愛するとはどのようなことか考えさせる。
4 教師の説話を聞く。 ・地域のために尽くしている人の紹介や体験談などを語り聞かせる。	・身近な郷土愛の事例について紹介する。

## 作成協力者

平成17年度 道徳授業地区公開講座推進委員会

### 【小学校】

委員長	福田 富美雄	北区立王子小学校校長
委員	筒井 鉄也	江東区立第六砂町小学校副校長
	武田 淳	中野区立中野神明小学校主幹
	大野 寿久	小平市立小平第八小学校主幹
	橋本 ひろみ	世田谷区立松原小学校教諭
	中嶋 博子	青梅市立第一小学校教諭
	齋藤 賢二	調布市立布田小学校教諭
	鈴木 裕子	町田市立忠生第一小学校教諭

### 【中学校】

委員長	坂谷 利雄	葛飾区立青戸中学校校長
委員	宮澤 一則	大田区立出雲中学校副校長
	坂口 幸恵	江戸川区立瑞江第二中学校副校長
	鮫島 千恵子	大田区立大森東中学校主幹
	鴨井 雅芳	目黒区立東山中学校教諭
	篠塚 浩幸	調布市立神代中学校教諭
	池田 富太郎	西東京市教育委員会指導主事

なお、東京都教育委員会においては、次の者が本書の編集に当たった。

大江 近	教育庁指導部義務教育心身障害教育指導課長
上原 一夫	教育庁指導部主任指導主事
赤堀 博行	教育庁指導部義務教育心身障害教育指導課統括指導主事
臼倉 美智	同 統括指導主事
田畑 美香	同 指導主事
井尻 郁夫	同 指導主事

平成17年度 東京都道德教育郷土資料集（第1集）

東京都教育委員会印刷者登録

平成17年度 第514号

平成18年3月28日

編集・発行 東京都教育庁指導部義務教育心身障害教育指導課

所在地 東京都新宿区西新宿2-8-1

電話番号 (03) 5320-6841

印刷会社 前田印刷株式会社

